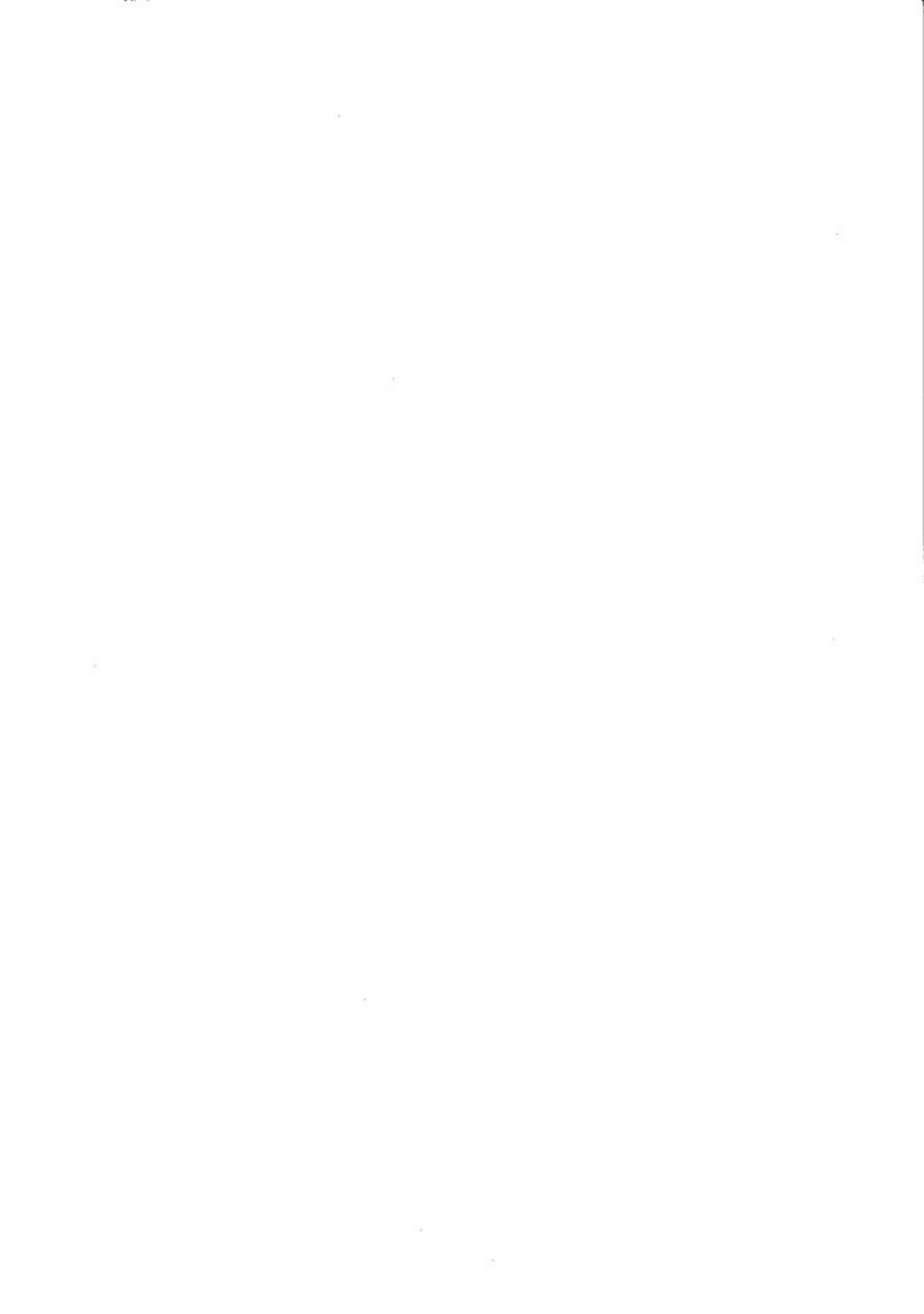


財團法人八尾市文化財調査研究会報告112

- I 大竹西遺跡 (第5次調査)
- II 木の本遺跡 (第14次調査)
- III 木の本遺跡 (第15次調査)
- IV 山賀遺跡 (第13次調査)
- V 弓削遺跡 (第7次調査)

2008年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團法人八尾市文化財調査研究会報告112

- I 大竹西遺跡 (第5次調査)
- II 木の本遺跡 (第14次調査)
- III 木の本遺跡 (第15次調査)
- IV 山賀遺跡 (第13次調査)
- V 弓削遺跡 (第7次調査)

2008年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部にあり、東に大阪府と奈良県の境を画する生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域であり、古くから生活が営まれた地域あります。このため、この河内平野には数多くの遺跡が存在し、私たちの祖先が残した貴重な文化財が数多く埋蔵されています。これらのかけがえのない文化財を開発による消滅から守り、後世に永く伝承させることができることを現在に生きる我々の大きな責務と認識しております。

そこで私共では、こうした消滅の危機にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

このたび、平成18・19年度に実施しました公共下水道事業に伴う発掘調査の整理が完了し、報告書として刊行することになりました。

本報告では、弥生時代後期の鉄剣が出土して話題を呼んだ大竹西遺跡、弥生時代前～中期の環濠集落が見つかっている山賀遺跡などを調査し、その周辺の様相を窺い知ることができました。

本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成20年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成18・19年度に実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成20年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・II成海佳子、III・V荒川和哉、IV西村公助、荒川で、全体の構成・編集は西村が行った。
1. 本書に掲載した地図は、八尾市教育委員会発行の16000分の1の八尾市埋蔵文化財分布図－平成19年度版－、八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月編纂)を使用した。
1. 本書で用いた標高はすべてT.P.(東京湾平均海面)+値(m)である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土座標第VI系)を示す。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器一白、須恵器一黒、
1. 土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1989『新版標準土色帖9版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を用いた。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

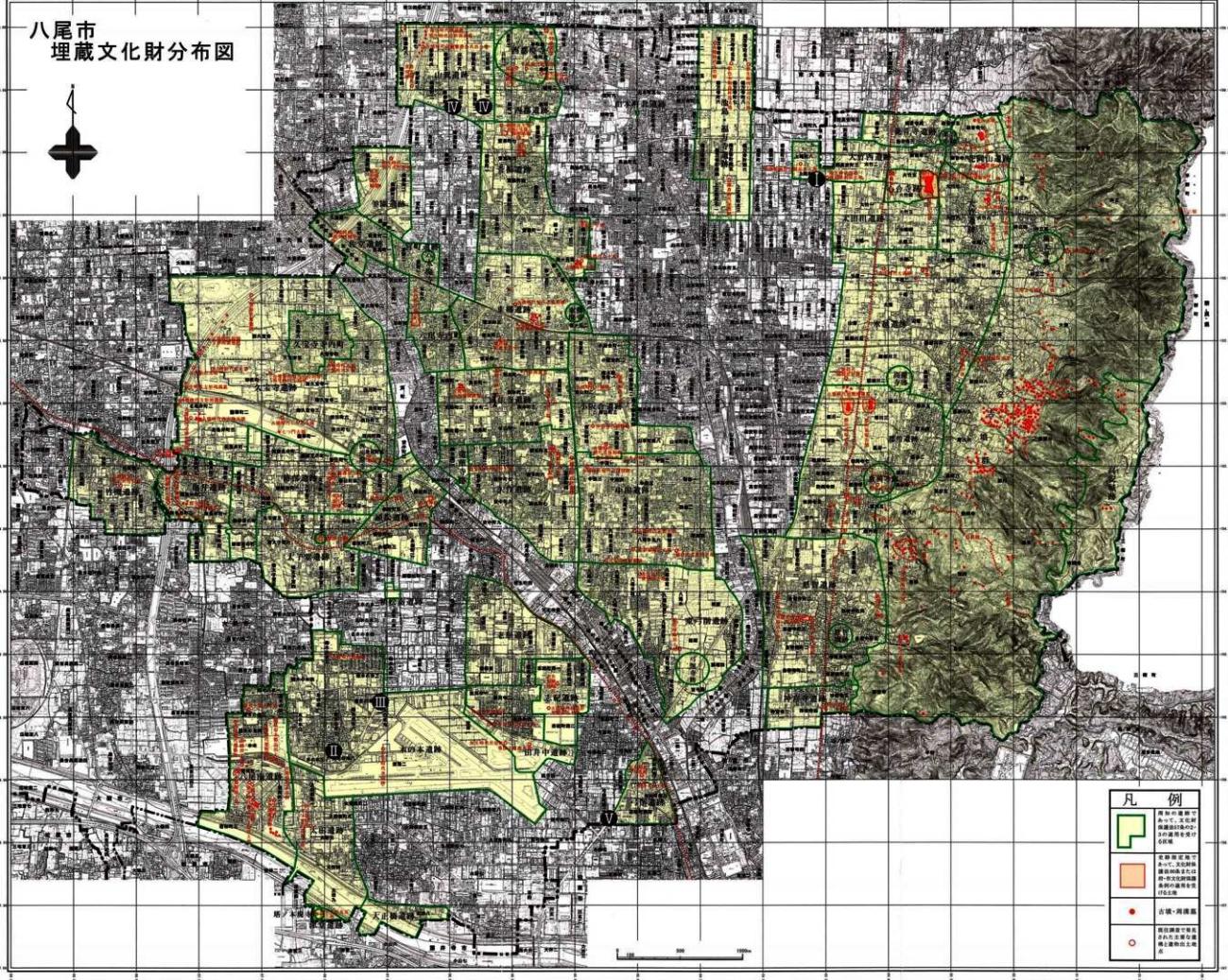
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 大竹西遺跡 第5次調査(O T N 2007-5)	1
II 木の本遺跡 第14次調査(S K 2006-14)	9
III 木の本遺跡 第15次調査(S K 2006-15)	13
IV 山賀遺跡 第13次調査(Y M G 2007-13)	17
V 弓削遺跡 第7次調査(Y G E 2007-7)	25

報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図



I 大竹西遺跡第5次調査(OTN2007-5)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市上尾町七丁目地内で実施した公共下水道工事(平成18年度恩智川東排水区第38工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する大竹西遺跡第5次調査(OTN2007-5)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成19年6月12日から8月7日（実働5日）にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約44m²である。
1. 現地調査においては、市森千恵子・中村百合・中浜輝志・鷹羽侑太の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年8月27日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、主に成海が行ったが、写真図版は鷹羽が作成した。

本 文 目 次

1. はじめに.....	1
2. 調査概要.....	2
1) 調査の方法と経過.....	2
2) 層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	2
3.まとめ.....	4

I 大竹西遺跡第5次調査 (OTN2007-5)

1. はじめに

大竹西遺跡は、八尾市北東部の上尾町七・八丁目、西高安町三・四丁目、大竹二・五丁目、樂音寺二丁目に所在し、生駒山地西麓に形成された扇状地の先端部に位置する。周辺には、北に樂音寺遺跡・北東に花岡山遺跡・東に大竹遺跡・南に太田川遺跡が接し、西側には池島・福万寺遺跡がある。また、東側の生駒山地西麓にかけては、樂音寺跡や古代寺院跡である心合寺跡や古墳時代中期の中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳をはじめとして西の山古墳・花岡山古墳・向山古墳などが位置しており、さらに山側には、古墳時代後期の群集墳である高安古墳群が位置する。

当遺跡は、平成元(1989)年、大阪市環境事業局八尾工場建替えに先立つ試掘調査の際、縄文時代～古墳時代に至る遺物包含層が確認されたことで周知された。この試掘調査の結果から、平成2(1990)年度に、当研究会が工場・煙突部分を対象として、第1次調査を行なった(原田他2007)。続く平成3(1991)年度には、第1次調査地の北隣で、衛生処理場更新工事に伴う第2次調査を行なった(高萩1992)。次いで平成8(1996)年度には、第1次調査地の東100m地点で、市立屋内プール建設に伴う第3次調査を行なった(西村他1997)。さらに平成11(1999)年度には、第3次調査地の北300m地点で、公共下水道工事に伴う第4次調査を行なっている(樋口2001)。

これらの調査の結果、当地では、弥生時代前期～古墳時代中期にかけての居住域・墓域・生産域の変遷が明らかにされた。なかでも、弥生時代後期から奈良時代にかけては、安定した住環境が連続していたことが指摘されている。また、第1次調査で出土した古墳時代前期の瑪瑙製錐形石製品や、第3次調査で出土した弥生時代後期の鋳造鉄劍は、当該時期の生活を知る上で重要な意味を持つものと考えられる。また、第4次調査で出土した縄文時代の貝化石は、当該時期の自然環境を知る上で重要な資料と言える(図1・表1参照)。

表1 周辺の調査地一覧

調査名	調査期間	調査面積	調査原因	検出遺構・出土遺物	文献
第1次調査 OTN1900-1	1990.06.01 ～ 1991.07.31	9000m ²	大阪市環境事業局八尾工場建替	弥生前期～墓域、弥生中期～水田・河川・壕、弥生後期～井戸・土坑・小穴、古墳前期～居住域/瑪瑙製錐形石製品、奈良～平安～土坑・小穴・鎌倉～近世～生産域	原田他 2007
第2次調査 OTN1991-2	1991.11.20 ～ 1992.01.31	671m ²	八尾市立衛生処理場更新	弥生中期前半～水田、弥生中期末～水田・古墳～土坑・鎌倉～溝、室町～水田	高萩 1992
第3次調査 OTN1996-3	1996.08.19 ～ 1996.09.30	2000m ²	八尾市立屋内プール建設	弥生前期(3.3～3.6m)～河川、弥生後期初頭～土坑・小穴・溝・河川・鉄劍、弥生後期前半～溝・古墳中期～土坑・小穴・溝、平安末～鎌倉～水田	西村他 1997
第4次調査 OTN1999-4	1999.11.04 ～ 1999.12.21	91m ²	公共下水道工事	縄文前期～貝化石、縄文後期～晩期～水成層、弥生前～中期～河川、弥生後期～遺構、時期不明～遺構	樋口 2001
第5次調査 OTN2007-5	2007.06.12 ～ 2007.09.07	44.3m ²	公共下水道工事	今回報告	

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市上尾町七丁目地内で行われた公共下水道工事(18-38工区)に伴うもので、当研究会が大竹西遺跡内で実施した第5次調査(OTN2007-5)である。調査区の位置は、第1次調査地・第3次調査地の南に面する道路部分で、第3次調査地から南西約50m地点に位置する。調査区は鋼矢板で囲まれた約7.2m四方の発進立坑で、南半分は道路下にあたるため、覆工板で覆われている。

工事による掘削深度は現地表下7m(T.P.+0.2)前後まで、工程は現地表下1mと4m前後に土留めのH鋼が2段設置され、その間に配管工事が行なわれるというものである。

調査は、1段目のH鋼設置後(現地表下2m前後まで掘削終了)から開始した。調査は工程優先で工事に併行して行なったため、2段目のH鋼設置・配管工事が終了する段階の現地表下3.6m(T.P.+3.5m)前後を境に、調査期間は2期に分かれた。前半は平成19年6月12・13・18日の3日間、後半は8月6・7日の2日間である。掘削については、機械・人力併用とし、遺構・遺物の検出に努め、平面図・断面図作成、写真撮影等の記録保存を適宜行なった。地層観察用のセクションは、当初北側に残したが崩落したため、掘削最終深度まで連続して南側に残した。

2) 層序

現地表の標高は、T.P.+7.2m前後である。現地表下2.2~2.5mまでは、旧耕土と盛土の混ざった地層が及んでいた。それ以下、現地表下7mまでで1~24層の地層を確認した。

1~3層は疊混粘土質シルトを主体とするもので、3層には攪拌が見られる。中~近世の作土の可能性がある。4~10層は河川埋土で、3つに大別できる。4・5層は細粒砂~中粒砂、6~9は粘土質シルトと極細粒砂・粗粒砂の互層、10層は粗粒砂・礫からなる。11~13層は湿地性の堆積土で、粘性の強い粘土質シルトである。11層はいわゆる「黒色帯」、12・13層には極細粒砂・礫が混入する。14・15層は流水堆積土で、粘土質シルトを主体とし、15層には植物遺体のラミナが見られる。16・17層は極細粒砂混粘土質シルトで、植物遺体を多く含む沼澤地状の堆積土である。18~22層は流水堆積土で、粘土質シルト・砂質シルト・極細粒砂などの薄い互層からなる。18層上面は土壤化する。23・24層は粘性の極めて強い粘土質シルトで、植物遺体を極めて多量に含む湿地性の堆積土である。

3) 検出遺構と出土遺物

24枚の地層のうち、川底である11・16・23層上面ほか、黒色帯直下の12・18層上面で遺構検出を試みたが、遺構は検出できなかった。遺物は、11層上面精査中、弥生時代中期頃と思われる土器片が1点のみ出土した。

1~3層は中~近世の作土で、西側の第1次調査地では、鎌倉~室町時代の洪れ砂に覆われた水田が、東側の第3次調査地では平安~鎌倉時代の水田が検出されていることから、この時期に対応するものと考えられる。4~10層からなる河川は、弥生土器片が出土したことや、第1次調査地・第3次調査地でも弥生時代中~後期の河川が数条検出されていることから、この時期のものと考えることができる。

11層については、第3次調査地で確認された最下の黒色土層が放射線炭素同位体の測定値から縄文晩期の堆積層「第1黒色帯」と確定されており、この層が11層とはほぼ同レベルに堆積している

I 大竹西遺跡第5次調査(OTN2007-5)

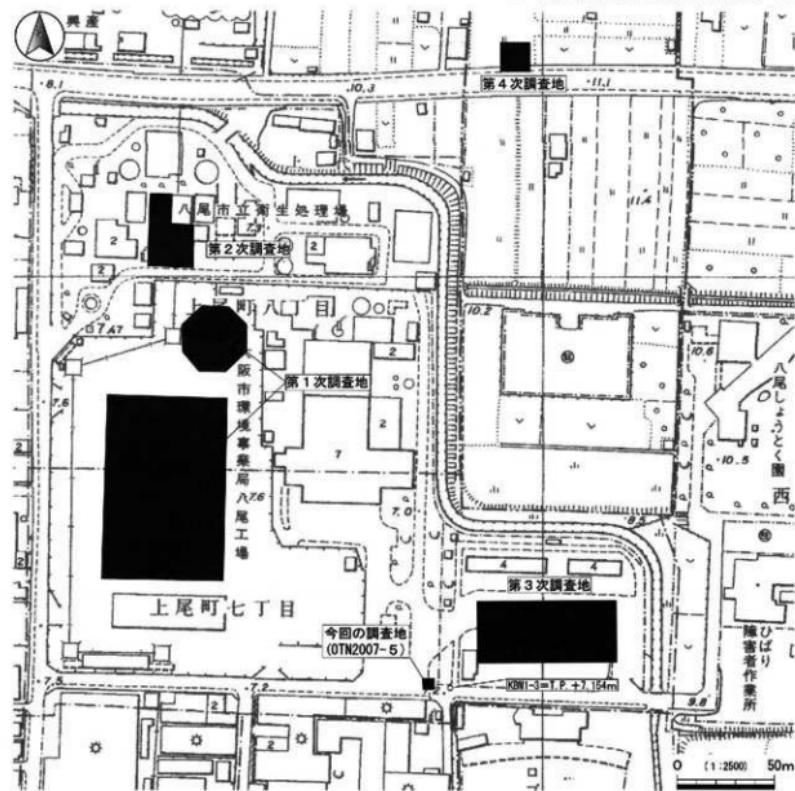


図1 調査地周辺図

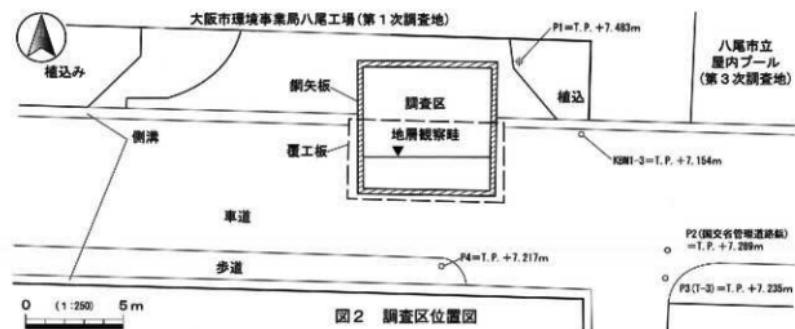


図2 調査区位置図

ことから、同一のものと断定できる。11層が「第1黒色帯」であれば、17層は「第2黒色帯」に、24層は「第3黒色帯」に対応する。18層は上面が土壤化していることから、ここに縄文時代晚期の生活面がある可能性も否定できない。

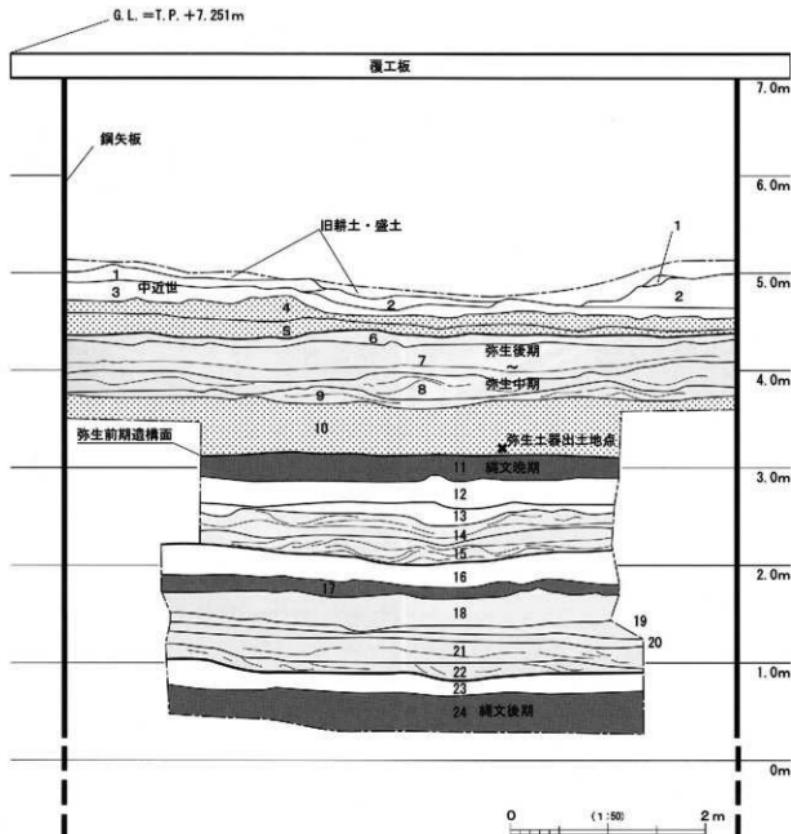
3. まとめ

今回の調査区は小面積ではあったが、下水道工事の立坑掘削に伴うものであったため、図らずも深層部の地層確認ができ、大きな成果が得られたといえる。

既往調査からも明らかにされているように、当地の自然環境が弥生時代後期を境として、大きく異なっていることが証明された。弥生時代後期以降奈良時代までは比較的安定した環境の下で活発な生活が展開しており、平安時代(後半か?)以降近年までは、農地として利用され続けてきたようである。一方、弥生時代後期以前は、多くの河川が流れ、流水・滯水を幾度も繰り返し、その間隙をぬって居住域・生産域・墓域が形成されるという集落の変遷が見られる。11層「第1黒色帯」は縄文時代晚期の堆積層で、第1次調査地でもほぼ同レベルに黒色土が堆積していることから、「黒色帯」が広範囲にわたって堆積していることが確認できた。以下の第2・第3黒色帯は縄文時代後~晚期の堆積層と考えられ、当時が湿潤な自然環境であったことが窺える。

参考文献

- ・原田昌則・荒川和哉他 2007 「大竹西遺跡(第1次調査)」 財団法人八尾市文化財調査研究会報告94 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1992「X 大竹西遺跡第2次調査(OTN91-2)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告34」(財)八尾市文化財調査研究会報告34 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助・樋口 紫 2008「大竹西遺跡」 第3次調査 -八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告- 財団法人八尾市文化財調査研究会報告106 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 紫 2001「IV 大竹西遺跡第4次調査」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告67」(財)八尾市文化財調査研究会



- 1 暗灰褐色混粘土質シルト
- 2 褐色礫混合土質シルト
- 3 黄～灰褐色細粒砂に1のブロック
- 4 灰褐色細粒砂
- 5 灰色繊～中粒砂
- 6 黄褐色砂質シルト
- 7 暗灰色粘土質シルト・灰色極細粒砂の互層
- 8 灰色粘土質シルト・白灰色粗粒砂の互層
- 9 暗灰色粘土質シルト・青灰色極細粒砂の互層
- 10 白灰色粗粒砂～礫
- 11 黑灰色粘土質シルト～第1黒色帯
- 12 青灰色礫(極少)混粘土質シルト
- 13 灰色極細粒砂(少量)混粘土質シルト
- 14 灰色粘土質シルト・白灰色極細粒砂の互層
- 15 植物遺体シルト・植物遺体シルト
- 16 植物遺体シルト・植物遺体含む
- 17 黑褐色極細粒砂混粘土質シルト(植物遺体含む)～第2黒色帯
- 18 白灰色粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂の互層～上面土壤化
- 19 灰色粘土質シルト
- 20 黑灰色粘土質シルト
- 21 灰色粘土質シルト・混極細粒砂
- 22 灰色極細粒砂混粘土質シルト
- 23 灰色粘土質シルト(植物遺体含む)
- 24 黑灰色粘土質シルト(植物遺体極多量に含む)～第3黒色帯

図3 断面図



調査地全景(南東から)



調査前の状況(東から)



北壁崩落状況(南東から)



調査区南部掘削状況—1～7層(北東から)



南壁実測(北から)



南壁1～7層—水系の高さT.P. +4.5m



調査区南部掘削状況—7～10層(北東から)



西部1～10層—水系の高さT.P. +4.5m



11層上面の状況(北西から)



11層掘削・12層上面精査(北東から)



南壁11～15層－水系の高さT.P. +3.0m



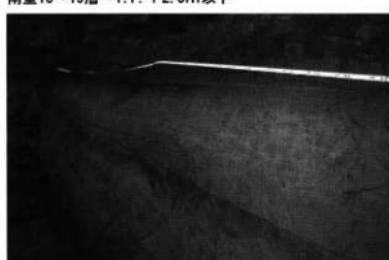
南壁15～18層精査の状況(北西から)



南壁16～19層－T.P. +2.0m以下



最終掘削・精査(北西から)



南壁16～24層－水系の高さT.P. +1.7m



南壁実測(南西から)



II 木の本遺跡第14次調査（SK2006-14）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市木の本一丁目、南木の本七丁目地内で実施した公共下水道工事（平成18年度飛行場北排水区第30工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第14次調査（SK2006-14）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成19年1月25日から1月31日（実働2日）にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約23m²である。
1. 現地調査においては、青山洋・飯塚直世・鷹羽侑太の参加を得た。
1. 本書作成に関わる業務は、成海が行った。

本　文　目　次

1. はじめ.....	9
2. 調査概要.....	10
1) 調査の方法と経過.....	10
2) 層序.....	10
3. まとめ.....	10

II 木の本遺跡第14次調査 (SK2006-14)

1. はじめに

木の本遺跡は、八尾市の南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯の東西約2.0km、南北約1.3kmの範囲に広がる弥生時代前期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市木の本一～三丁目、南木の本二～九丁目、空港一丁目がその範囲に含まれる。地理的には、河内平野の南西部にあたり、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置する。同様の条件で、当遺跡の東側には志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が、北～西には太子堂遺跡・亀井遺跡・竹測遺跡が連なって位置している。一方、南～西に隣接する八尾南遺跡・太田遺跡は、羽曳野台地の先端に位置しており、地理的な条件は異なっているといえる。

当遺跡発見の契機となったのは、昭和56(1981)年に実施した八尾市南木の本4丁目での試掘調査で、弥生時代中期・古墳時代中期の遺構が検出されている(原田他1983)。その後、昭和57(1982)年度からは、おもに八尾空港内での大規模な調査が行われ、平安時代に遡る条里水田(原田他



調査名	調査期間	調査面積	調査原因	検出遺構・出土遺物	文献
1991-468	19920113 19920303	6.25m ²	工場建設	古墳後期 - 土坑・溝・水田・須恵器・埴輪	澁 1993
第6次調査 SK1994-06	19940303 ~ 19940711	71m ²	地下ケーブル埋設	近世以前 - 河川1・溝1	西村 1996

図1 調査地周辺図

1984)が検出されている。さらに空港の北側を区画する昭和沢の川(八尾空港北濠)や遺跡北部の平野川改修工事などに伴う発掘調査も実施されており、東部～中央部では弥生時代前期、北部・西部では古墳時代中期の遺構が検出されている(藤沢他

1999 岩瀬他1999 藤田2001)。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市木の本一丁目・南木の本七丁目地内で行なわれた公共下水道工事(18-30工区)に伴うもので、当調査研究会が木の本遺跡で実施した第14次調査(S.K2006-14)である。調査区は、昭和56年度調査地から南へ500mの地点、昭和沢の川(空港北濠)北岸の道路部分で、西南西200mに市教委91-468調査地があり、東約40mには第6次調査地(以下6次と呼ぶ)-2区が、西20mには6次-3区が位置する(図1・表1参照)。

調査区は鋼矢板で開まれた東西6.15m・南北3.75mの発進立坑で、掘削深度は現地表下4.7(T.P.+6.1)m前後まで、工程は現地表下1m・3.75mに土留めのためのH鋼が2段設置されるものである。調査で使用した標高は、調査区南の3級基準点(T.P.+11.372m)を使用した。

調査は、現地表下2m前後以下、1段目のH鋼設置後から行なった。掘削に際しては、現地表下2～5m前後まで、遺構・遺物の有無を確認しながら、機械・人力を併用しておこなった。地層観察用の畦は調査区西端に残した。調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

2) 層序

現地表の標高は、T.P.+10.9m前後である。前述のとおり、現地表下約2m以上については観察していない。それ以下現地表下約5mまで1～17層の17枚の地層を確認した。

1層暗オリーブ灰色粗粒砂混粘土質シルト・2層青灰色粗粒砂～礫は、ともに含水層である。3～5層はオリーブ灰色～オリーブ黒色の粘土質シルト主体の地層で、砂質シルト・植物遺体・礫などを含む互層である。6層は暗緑灰色礫少量混砂質シルトで、比較的しまりのよい地層で、上面に踏み込みがある。7層は灰白色～緑灰色の粗粒砂～礫である。8～10層は暗緑色～灰色系の粘土質シルトで、9層は植物遺体を含む。11層は緑灰色極細粒砂である。12～16層は、灰色系の粘土質シルト・極細粒砂などからなる互層である。最下で確認した17層は極細粒砂で、ここからの湧水は多かった。このうち、2層粗粒砂～礫は、東隣の6次-2区で検出した河川N R 101に対応するものと考えられる。また、7層粗粒砂～礫および8層粘土質シルトは、西隣の6次-3区の7層細粒砂・8層粘土にそれぞれ対応するものと考えられる。既往調査の結果を踏まえれば、2層は近世の河川に、7層は近世以前(平安末～中世)の洪水砂および河川堆積層にあたり、8層は平安時代以降の水田耕作土の可能性がある。

3. まとめ

今回の調査では、第6次調査で確認された地層に対応する地層を確認した。当調査地では、8・



図2 調査区位置図

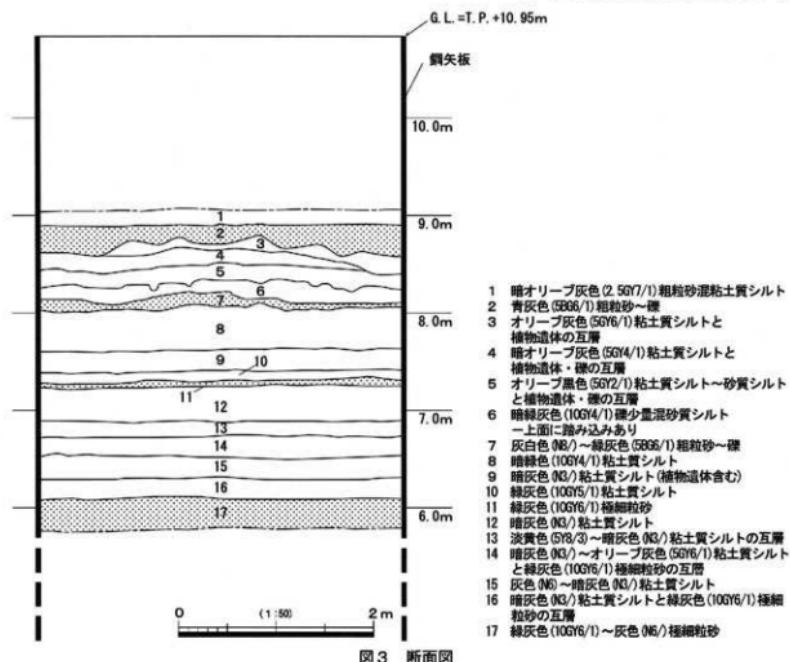


図3 断面図

12層が、比較的安定した堆積状況を示すが、それ以外は粘土質シルトを主体として植物遺体や砂を含む互層が続くことから、当地は河川～湿地の状態を繰り返していたものと考えられる。

参考文献

- ・酒 純 1993「1. 木の本遺跡(91-468)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・西村公助 1996「I 木の本遺跡(第6次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告50』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・成海佳子・奥田 尚 1983「第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・原田昌則・成海佳子編 1984「(財)八尾市文化財調査研究会報告4 木の本遺跡一八尾空港整備事業に伴う発掘調査一」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・藤沢真依・横田明・地村邦夫・井西貴子 1999「木の本遺跡発掘調査概要・Ⅲ」大阪府教育委員会
- ・岩瀬透・横田明 1999「木の本遺跡発掘調査・Ⅳ」大阪府教育委員会
- ・藤田道子 2001「木の本遺跡発掘調査・Ⅴ」大阪府教育委員会



調査地周辺(東から)



上層人工掘削(東から)



上層調査風景(東から)



西壁 1～9層



下層機械掘削(南西から)



西壁 9～17層



完掘(東から)

III 木の本遺跡第15次調査（SK2006-15）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南木の本九丁目地内で実施した公共下水道工事（平成18年度飛行場北排水区第29工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第15次調査（SK2006-15）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成19年2月19日から2月21日（実働3日）にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は49.5m²である。
1. 現地調査においては、飯塚直世・鷹羽侑太の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成19年3月23日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、図面レイアウト・図面トレース－荒川が行った。他に、上記現地調査参加者の協力を得た。
1. 本書の執筆・構成は、荒川が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	13
2.調査概要.....	14
1) 調査の方法と経過.....	14
2) 層序.....	14
3) 検出遺構と出土遺物.....	15
3.まとめ.....	15

III 木の本遺跡第15次調査 (S K2006-15)

1. はじめに

木の本遺跡は、八尾市の南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯の東西約2.0km、南北約1.3kmの範囲に広がる弥生時代前期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市木の本一～三丁目、南木の本二～九丁目、空港一丁目がその範囲に含まれる。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+9.3～13.1mを測る。

当遺跡は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南端に位置する。河内平野には、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が西ないし北方向に放射状に流れている。当遺跡は、旧大和川水系のうち平野川左岸一帯の沖積地上に位置する。当遺跡の範囲は広く、西側に八尾南遺跡・太田遺跡が、東側に田井中遺跡が隣接している。

当遺跡の概要および既往調査の成果等については、既刊の報告書に詳しいので、本書での記載は割愛する。概観すると、北東部で弥生時代前期の遺構・遺物（横田他 2004）、北西部で弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期の集落に伴う遺構・遺物（原田他 1983）、南東部で平安時代中期から鎌倉時代前期の集落に伴う遺構・遺物（原田他 1984）、南西部で平安時代の集落に伴う遺物（米田 1983）、中央部（八尾空港内）で平安時代に遡る条里遺構（原田他 1984）が検出されている。このうち、弥生時代前期の遺構群は、隣接する田井中遺跡の当該時期の遺構群との関連性を持つものである。

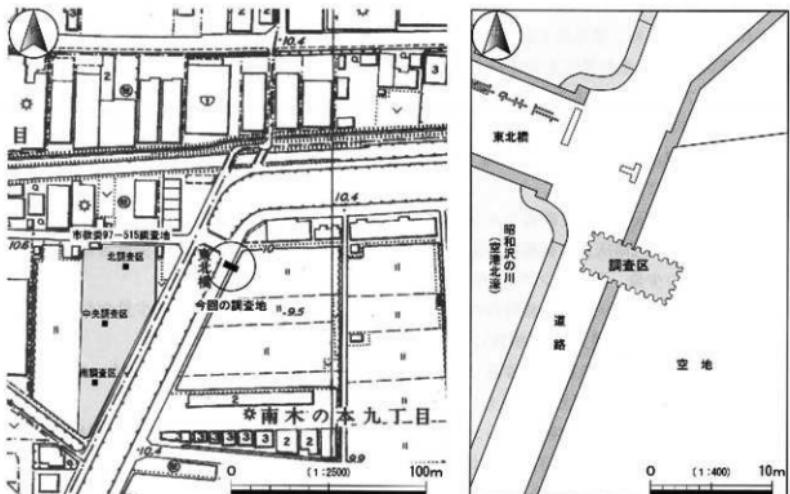


図1 調査地および調査区位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は、八尾空港の北西側に位置し、空港の北側を東西に伸びる昭和沢の川(八尾空港北濠)が南西側に屈曲する部分に架かる東北橋東側の道路および空地部分である。調査区は、下水道の発進立坑部分で、調査区の西半部が道路上に、東半部が空地にかかる(図1)。

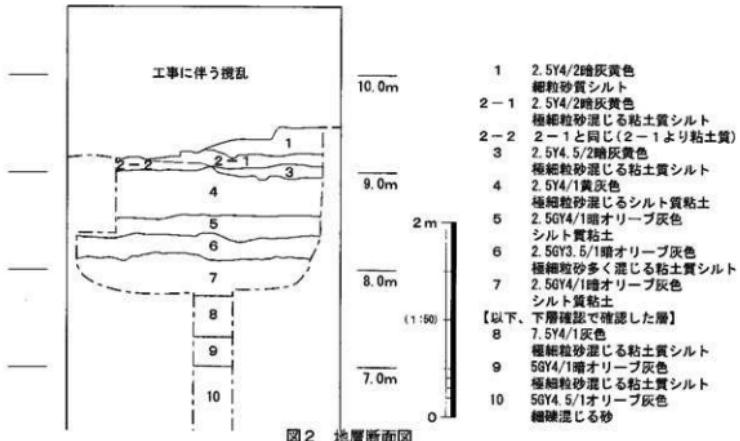
掘削については、調査区の西部が昭和沢の川の護岸擁壁設置工事により破壊されている可能性を踏まえ、調査区東半部から開始した。先ず、調査区東半部の現地表(T.P.+10.7m)下3.0mまでの掘削を、遺構・遺物の有無を確認しながら、機械・人力を併用して行った。遺構・遺物が検出されなかつたため、調査区中央部で地層の記録を取り、調査区西半部を機械で掘削した。結果として、西半部は護岸擁壁設置工事による破壊は免れており、先行工事により破壊されていた現地表下1.3~1.4m以下の地層が良好に残っていた。現地表下3.0mまでの調査終了後、現地表下4.4m(T.P.+6.3m)までの地層確認を行った。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南方約100mの道路上の標高値:T.P.+10.4m)を使用した。

調査の結果、周辺の既往調査で確認されている平安時代中期以降の耕作土に対照される地層が確認された。

2) 層序(図2)

調査区中央部の東向き断面で地層の記録を行った。8層以下は、地層確認で確認された地層で、図2に示した7層・8層の層界以下は、模式的な柱状図である。現地表下1.4~2.2m(T.P.+9.3~8.5m)に堆積する1層から5層までは、昭和沢の川を挟む西隣で市教委が実施した調査(木の本遺跡97-515の調査)で確認されている平安時代中期以降の耕作土(吉田1997)に対照できる。現地表下2.3~3.7m(T.P.+8.35~7.0m)以下に堆積する6層から9層までは、湿地性堆積物と見られる。そのうち、現地表下2.35~2.6m(T.P.+8.35~8.1m)に堆積する6層は、極細粒砂を斑状・管状に含み、生物擾乱を受けたものと推測される。現地表下2.6~3.0m(T.P.+8.1~7.7m)に堆積する7層は、木の本遺跡97-515の各調査区で確認されている炭酸鉄を含む地層に対照できる。現地表下3.7m(T.P.+7.0m)以下に堆積する10層は、木の本遺跡97-515の中央調査区・南調査区で確認されている砂層に対照できる地層で、河川堆積物と見られる。以下に、調査区で確認された地層について記す。

- 1層: 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂質シルト。炭化物を含む。酸化鉄・酸化マンガン(斑点状)。
- 2-1層: 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂混じる粘土質シルト。細礫までの砂礫を少量含む。酸化鉄(斑点状)少量、酸化マンガン(斑点状)多。
- 2-2層: 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂混じる粘土質シルト。細礫までの砂礫を少量含む。2-1層より粘土質。酸化鉄(糸根状)。
- 3層: 2.5Y4.5/2暗灰黄色極細粒砂混じる粘土質シルト。細礫までの砂礫を多く含む。南部では、2層と4層の間で部分的に見られる。酸化鉄(糸根状)密。
- 4層: 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。所により見られる葉層状の極細粒砂を挟み、上中下の3層に細分できる。酸化鉄(糸根状)。
- 5層: 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。酸化鉄(糸根状)は本層の上部まで見られる。
- 6層: 2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色極細粒砂多く混じる粘土質シルト。5G4/1極細粒砂を斑状・



管状に含む。

7層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。上部に炭酸鉄が多く見られる。

8層：7.5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。

9層：5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。

10層：5GY4.5/1オリーブ灰色細礫混じる砂。平行層理が見られ、細礫の混じりが多い上層と極粗粒砂までの砂が日立つ下層に分けられる。

3) 検出遺構と出土遺物

平面的に検出された遺構はなかった。出土遺物は、4層に土師質の土器の極細片が1点含まれていたが、取上げは不可能であった。

3.まとめ

今回の調査では、周辺の既往調査において確認されている平安時代以降の耕作土層と対照できる地層を確認した。このことから、今回の調査地周辺も平安時代以降は耕作地として利用されていたと考えられる。下層部分では遺構・遺物の検出ではなく、地層の堆積状況から調査地は河川・湿地であったと推測される。

参考文献

- 横田 明・山田豊一編 2004 「大阪府埋蔵文化財調査報告書2003-2 木の本遺跡」 大阪府教育委員会
- 原田昌則・成海佳子・奥田 晃 1983 「第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」 八尾市教育委員会
- 米田敏幸 1983 「1. 木の本遺跡」 昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その成果と概要—」 (財)八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則・成海佳子編 1984 「(財)八尾市文化財調査研究会報告4 木の本遺跡一八尾空港整備事業に伴う発掘調査」(財)八尾市文化財調査研究会
- 吉田野乃 1997 「4. 木の本遺跡(97-515)の調査」『八尾市文化財調査報告 平成10年度国庫補助事業八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書1』 八尾市教育委員会



調査地全景および機械掘削状況（北東から）



調査区中央部地層断面（東から）

IV 山賀遺跡第13次調査（YMG2007-13）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市山賀町一丁目・三丁目地内で実施した公共下水道工事（新家排水区第1工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する山賀遺跡第13次調査（YMG2007-13-1・2）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査の期間・調査担当者・調査面積・調査補助員は、以下の通りである。
山賀遺跡第13次1調査区の調査（YMG2007-13-1）
期間：平成19年4月2日～平成19年4月5日（実働4日）
調査担当者：西村公助
調査面積：24.64m²
調査補助員：青山 洋・鷹羽侑太・中浜輝志
山賀遺跡第13次2調査区の調査（YMG2007-13-2）
期間：平成19年5月21日～平成19年5月24日（実働4日）
調査担当者：荒川和哉
調査面積：26.88m²
調査補助員：市森千恵子
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年6月5日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務の担当は、以下の通りである。
【図面レイアウト・図面トレース】荒川・西村、【遺物実測】市森、【執筆】荒川・西村（文責は目次に記載）、【編集】荒川、他に上記現地調査補助員の協力を得た。

本　文　目　次

1.はじめに（荒川）	17
2. 1調査区の調査概要（西村）	18
1) 調査の方法と経過	18
2) 層序	18
3. 2調査区の調査概要（荒川）	18
1) 調査の方法と経過	18
2) 層序	18
3) 検出遺構と出土遺物	19
4.まとめ（荒川）	22

IV 山賀遺跡第13次調査 (YMG2007-13)

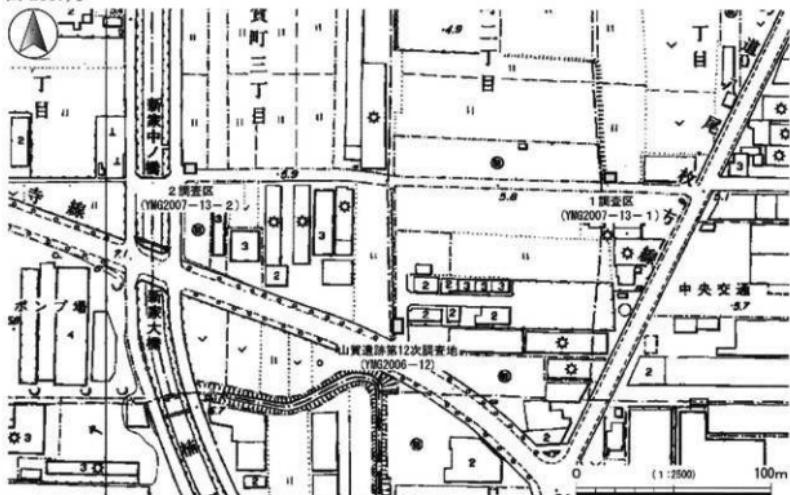
1. はじめに

山賀遺跡は、八尾市北部と東大阪市南部の西寄りに位置する。現在の行政区画では、八尾市新家町一～八丁目・山賀町一～六丁目、および東大阪市若江西新町五丁目・若江南町四～五丁目に当たり、東西・南北ともに約0.8kmの範囲で広がる縄文時代後期以降の複合遺跡である。

地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+3.3～5.9mである。当遺跡の周辺には、東に西郡遺跡・西郡廃寺、南東に萱振遺跡、南西に友井東遺跡・美園遺跡、西に新上小阪遺跡・小若江遺跡、北西に上小阪遺跡、北に若江北遺跡など、多くの遺跡がある。

当遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行われた楠根川改修工事の掘削残土から弥生時代前期の土器・石器が多量に発見されたことにより周知されるようになった。その後、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現、(財)大阪府文化財センター)・東大阪市教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会)により多くの調査が行われている。これらの調査の成果については、既刊の報告書に詳しいので、本書では記載を割愛する。

当研究会による当遺跡の調査は、12次にわたり実施されている。今回の調査地の南側で当研究会が実施した第12次調査(YMG2006-12)では、現地表下4.0～4.1m(T.P.+2.0～1.9m)で弥生時代中期以前と推測される畦畔状の高まりと水田耕作土と考えられる地層が確認されている(鳥田2007)。



2. 1 調査区の調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は、府道八尾枚方線の山賀町一丁目交差点より西側約50m地点に位置する。調査区は、下水道の立坑部分の工事により破壊される部分である。規模は、南北4.4m・東西5.6mの方形で、調査面積は24.64m²である。

調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。掘削については、現地表(T.P.+5.75m前後)下4.8m前後までを機械と人力を併用して行った。

調査の結果、検出された遺構および遺物の出土はなかった。

2) 層序

現地表下から4.8m前後までに7層の地層堆積を確認した。

0層盛土

- 1層 N3/0暗灰色細粒砂混粘土。【旧水田耕作土】。
- 2層 10YR4/4褐色細粒シルト質粘土。
- 3層 10YR6/1褐灰色細粒シルト。
- 4層 5B4/1暗青灰色粗粒～細粒シルト。
- 5層 5Y6/1灰色粗粒～細粒砂。
- 6層 5B4/1暗青灰色粘土。2～6層は河川堆積である。

3. 2 調査区の調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は、八尾市山賀町三丁目地内の楠根川に架かる新家中ノ橋の東詰に位置する。調査区は、下水道の立坑部分の工事により破壊される部分である。規模は、南北4.8m・東西5.6mの方形で、調査面積は26.88m²である。

調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に基づき、下水道工事の進捗状況を考慮しながら実施した。掘削については、現地表(T.P.+5.9m前後)下1.8mまでは、工事に伴いすでに掘削されていたため、現地表下1.8mから2.8m前後までを、地層の観察に比重を置き、遺構・遺物の有無を確認しながら人力・機械併用(主に機械)で行った。現地表下2.8m以下、工事により破壊される現地表下5.0mまで、下層確認を行った。

調査の結果、平面的に検出された遺構はなかったが、近世以降と推測される耕作に伴う小規模な遺構埋土を確認した。出土遺物は、須恵器の破片2点で、整理用コンテナ(縦60cm×横40cm×高さ20cm)1箱に収まる。

2) 層序

調査地で確認された地層は、小規模な遺構埋土を除き17層確認された。1層～10層が調査区中央部北向き断面で確認された地層で、11層以下が下層確認時に北塙で確認された地層である。以下に各層について記す。

- 1層 10GY3/1暗緑灰色砂質シルト(細粒で粗粒砂混じり)。【旧水田耕作土】
- 2層 10GY4/1暗緑灰色～10GY5/1緑灰色礫(径7mmまで)混じる砂質シルト(粗粒で砂がち)。下部に3層のブロック(径5cmまで)【水田耕作土】

- 3層 5Y4/1灰色砂(極粗粒～極細粒)混じる粘土質シルト。【水田耕作土】
- 4層 10Y3.5/1灰色砂礫(径3mmまで)混じる粘土質シルト。上部に砂礫が斑状に多く混じり、下部に7.5Y4.5/1灰色粘土質シルトのブロック(径6cmまで)を多く含む。酸化鉄が染み状に沈着。【水田耕作土】
- 5層 2.5Y2.5/1黒褐色砂(細粒～極細粒)混じる粘土質シルト。乾痕が見られる。【6層の土壤化層】
- 6層 7.5Y5/1灰色砂(極細粒)混じる粘土質シルト。
- 7層 7.5Y4/1灰色砂(極細粒)混じる粘土質シルト。
- 8層 2.5Y4/1黄灰色砂(極細粒)混じる粘土質シルト。【9層の土壤化層】
- 9層 2.5Y4.5/1黄灰色砂(極細粒)混じる粘土質シルト。5Y5/1灰色砂(細粒～極細粒)が斑状に混じる。
- 10層 5Y4.5/1灰色シルト質砂(細粒～極細粒)。2層～10層上部に酸化鉄が管状に沈着。
- 11層 10Y5/1灰色シルト混じる砂(細粒～極細粒)。
- 12層 N7/0灰白色砂(上部：中粒～極細粒、下部：極粗粒～中粒)。5G5/1緑灰色砂(細粒～極細粒)の薄層とシルト質砂(細粒～極細粒)の葉層の互層を上部に挟む。主に上部に木本の植物遺体を含む。
- 13層 2.5GY6.5/1明オリーブ灰色砂(極粗粒混じる粗粒～中粒)。10Y4/1灰色砂(極細粒)混じる粘土質シルトの葉層を挟む。
- 14層 7.5Y3/1オリーブ黒色砂(極細粒)混じる粘土質シルト。ブロック状で5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土のブロック(径1.5cm前後)・炭化物粒を含む。【遺構埋土か】
- 15層 10Y3/1オリーブ黒色砂(極細粒)混じる粘土質シルト。一部ブロック状で、2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質砂(極細粒)を斑状に含む。木本の植物遺体を少量含む。【遺構埋土か】
- 16層 10Y4.5/1灰色シルト質砂(細粒～極細粒)。
- 17層 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質(細粒～極細粒)泥。上部に炭化物粒を層状に含む。【18層の土壤化層か】
- 18層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥質砂(細粒～極細粒)。2.5GY7/1明オリーブ灰色砂(極粗粒～極細粒)のレンズ状の薄層を挟む。
- 19層 N7/0灰白色砂(粗粒、下部は細粒～極細粒へと漸移)。

3) 検出遺構と出土遺物

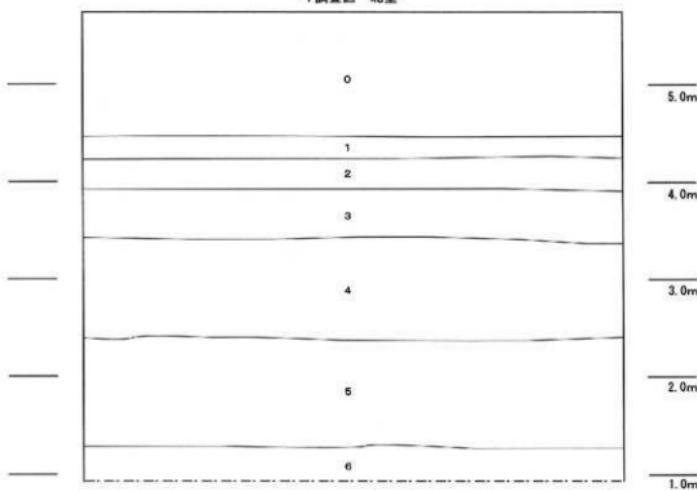
平面的に検出された遺構はなかった。調査区中央部北向き地層断面で、1層に覆われ2層を切る遺構埋土を確認し、3層上面に2層を埋土とする凹凸を確認した。いずれも、耕作に伴うものと見られる。時期を比定できる出土遺物はなく時期は不明であるが、近世以降と推測される。

出土遺物は、1層および4層(3層との境界付近)から須恵器の破片が1点ずつ出土している。4層から出土した須恵器杯身は、6世紀代のものと見られる。4層は、出土遺物から、古墳時代後期以降の堆積層と考えられる。



図2 調査区位置図

1調査区 北壁



2調査区 北壁

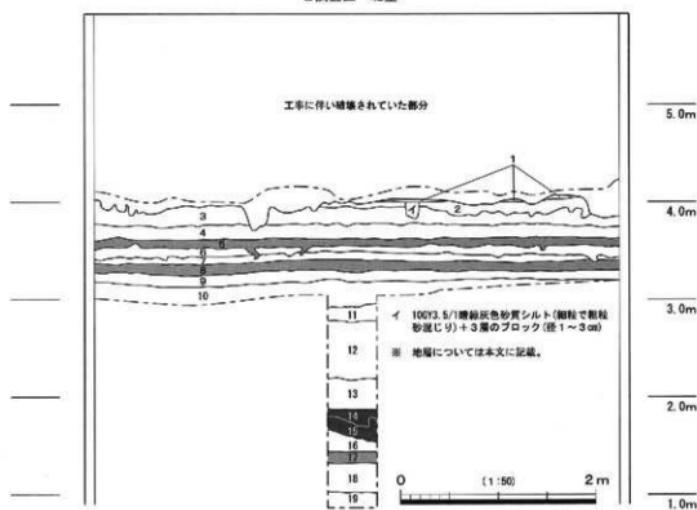


図3 1・2調査区 地層断面図

4.まとめ

今回の調査は、1・2調査区ともに平面的に検出された遺構はなく、出土遺物も殆どなかった。しかし、地層観察の結果から、調査地周辺の環境とヒトの活動の一端を窺うことができた。

1 調査区 旧耕作土の下位に、河川堆積物と見られる粗粒砂～粘土の堆積層が確認された。出土遺物がないため、河川の形成・埋没時期は不明である。砂層が、第12次調査地で確認された弥生時代中期以前の水出耕作土や2調査区で確認された遺構埋土の上下に堆積する砂層と対照できるものであれば、この時期も河川であった可能性がある。

2 調査区 現地表下1.9～2.3m (T.P.+4.0～4.4m) で、近世以降の耕作土と、耕作に伴い形成されたと見られる遺構埋土が確認された。また、下層確認部分の現地表下4.1～4.4m (T.P.+1.9～1.6m) で、遺構埋土と見られる地層が確認された。出土遺物がないため時期は不明であるが、第12次調査地の地層の相対関係と対照すれば、弥生時代中期以前と推測される地層に相当する。調査地周辺において、上位の砂層を除去した面で遺構検出面があると推測される。

参考文献

- ・鳥田裕弘 2007 「Ⅶ 山賀遺跡第12次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告98』(財)八尾市文化財調査研究会



調査地周辺（南東から）



機械掘削 [T.P. +3.25mまで] （西から）



北壁 [T.P. +3.25mまで] （南から）



調査地全景(南から)



下層確認部分掘削状況(南西から)



地層断面 T.P. +4.0~3.0m付近
(調査区中央部北向き、北西から)

V 弓削遺跡第7次調査（Y G E 2007-7）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市弓削町二丁目・志紀町南四丁目地内で実施した公共下水道工事（18-24工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第7次調査（Y G E 2007-7）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査の期間・調査担当者・調査面積・調査補助員は、以下の通りである。
期間：平成19年6月4日～平成19年6月19日（実働10日）
調査担当者：荒川和哉
調査面積：約33.4m²
調査補助員：市森千恵子・梶本潤二・鷹羽侑太・中浜輝志・中村百合・村井厚三
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年7月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務の担当は、以下の通りである。
図面レイアウト・図面トレース・編集・執筆：荒川
遺物実測・遺物図面トレース：市森
他に上記現地調査補助員の協力を得た。

本　文　目　次

1. はじめに.....	25
2. 調査概要.....	28
1) 調査の方法と経過.....	28
2) 層序.....	28
3) 検出遺構と出土遺物.....	31
3.まとめ.....	37

V 弓削遺跡第7次調査 (Y G E 2007-7)

1. はじめに (図1、表1)

弓削遺跡は、八尾市南東部に位置する。現在の行政区画では、八尾市志紀町南二丁目・四丁目、および弓削町三丁目・弓削町南三丁目の一部に当たり、東西約0.5km・南北約0.7kmの範囲で広がる弥生時代後期以降の複合遺跡である。

地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+12.8~15.0mである。当遺跡の周辺には、長瀬川を挟んで北東側には東弓削遺跡が、北西側には志紀遺跡・田井中遺跡・木の本遺跡があり、南側には本郷遺跡(柏原市)が隣接する。本郷遺跡は、弓削遺跡と一連の遺跡と捉えられる。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会(以下、市教委とする)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会とする)により発掘調査が行われている。本郷遺跡内では、柏原市教育委員会により発掘調査が行われている。

今回の調査地周辺における弓削遺跡・本郷遺跡の既往調査については、図1・表1に示したが、以下に、これらの主な調査成果を時期ごとに概観する(文中の番号は図1の調査地番号)。

縄文時代 両遺跡内でヒトの活動の痕跡が見られるのは縄文時代中期以降で、本郷遺跡北部の22・23・36で縄文時代中期・晚期の土器が出上している。22で検出された縄文時代晚期の埋甕を除き、砂層からの出土で、縄文時代の両遺跡の状況を知るまでには至っていない。

弥生時代前期・中期 両遺跡で弥生時代前期の遺構・遺物は確認されていない。弥生時代中期には、弓削遺跡南部の8・11、本郷遺跡北部の23・24・29で土器が出上している。また、24では溝状遺構が確認され、29では土器群を伴う土坑が検出されていることから、ヒトの居住があったことが窺えるが、これらの面的な広がりは確認されていない。

弥生時代後期 本格的なヒトの活動の痕跡が見られるのは、弥生時代後期になってからで、両遺跡で遺構・遺物が多く検出されている。その中から主立ったものを挙げると、弓削遺跡北部の1で大量の土器が出上した南北に伸びる大溝、本郷遺跡北部の29で方形周溝墓・小銅鏡を伴う溝が検出されている。これらの調査成果から、弥生時代後期には集落としてのまとまりを持つようになったことが窺える。

古墳時代初頭・前期 両遺跡で古墳時代初頭・前期の「遺物包含層」が確認されており、この時期の明確な遺構は本郷遺跡の22で井戸・溝状遺構が、29でこの時期を前後する溝が検出されている。弓削遺跡北東部の21では、一括性が高い古墳時代初頭の土器が出土しており、その中には伊勢湾地方からの搬入品であるS字口縁甕や阿波地方からの搬入品である複合口縁甕が出土しており、人的・物的交流があったことを窺わせる。

古墳時代中期・後期 この時期の遺構は、主に弓削遺跡南西部の7で中期の土坑、本郷遺跡北東部の25で後期の溝、同じく北西部の29で中期の竪穴住居・大溝が検出されている。これらの遺構・遺物が検出された北側の弓削遺跡南部から本郷遺跡の北東部にかけての7・8・22・24で埴輪が出土しており、埋没古墳が存在する可能性がある。



図1 調査地周辺図

表1 周辺の調査一覧表

調査番号	調査名	所在地	調査主体	主な成果	文献/発行年
					参考文献
1 YCEM-1	北紀町南2	馬場研究会	地質調査、古墳(土器群)、奈良・井戸	『昭和59年度奈良県調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告7/1985	
2 99-333	北紀町南4	八尾教委	古墳(土器群)、土坑	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査研究会報告25/1992	
3 91-631	志紀町南4	八尾教委	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告33/1995	
4 97-444	丹波町南3	八尾教委	古墳(土器群)、中塗: 井戸・土坑	『丹波道新規探査報告書』八尾市文化財調査報告10/2000	
5 98-380	志紀町南3	八尾教委	古墳(土器群)、中塗: 井戸・土坑	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告40/1999	
6 YCE99-2	志紀町南2	馬場研究会	古墳(土器群)、奈良・井戸	『馬場研究会八尾市文化財調査研究会報告67』/2001	
7 99-429	志紀町南4	八尾教委	古墳(土器群)、土塗: 井戸	『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44/2001	
8 99-S24	志紀町南3	八尾教委	古墳(土器群)、土塗: 井戸・土坑	『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告45/2002	
			土塗: 上塗	『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告46/2003	
9 2002-66	志紀町南3	馬場研究会	近世墓誌: 墓	『近世墓誌』(書)	『近世墓誌』(書)
10 YCE2003-4	志紀町南3	馬場研究会	古墳(土器群)	『近世墓誌』(馬場研究会報告57)2003	
11 2002-23	丹波町南3	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48/2003	
12 YCE2003-3	志紀町南3・4	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49/2004	
13 2003-193	志紀町南2	馬場研究会	平安時代: 井戸・排水溝	『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49/2004	
14 2003-319	志紀町南2	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告50/2005	
15 2004-259	志紀町南2	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告51/2006	
16 2004-347	志紀町南3	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告52/2006	
17 2005-185	志紀町南2	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53/2007	
YGH2005-6	志紀町南2	馬場研究会	古墳(土器群)	『馬場研究会報告97』/2007	
18 2005-160	志紀町南2	馬場研究会	古墳(土器群)	『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53/2006	
19 2006-504	丹波町3	馬場研究会	近世: 井戸・土塁(含む旧田)	『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告52/2006	
20 2007-34	志紀町南4	馬場研究会	古墳(土器群)	本件	
YGH2007-7	丹波町南2・志紀町南4	馬場研究会	今堀無想		
21	志紀町南1・2	馬場教委	古墳(土器群)	『淀川区南部城下水道事業に伴う土塁内・志紀・弓削・太平中塗古墳調査報告』/1995	
22 81-1次	本郷3	柏原教委	縄文土器: 古墳(土器群)、古墳崩壊: 前段: 井戸・古墳(土器群)・土塗: 墓	『柏原市縄文文化財発掘調査報告 1981年度』/1982	
23 83-1次	木郷3	柏原教委	縄文土器: 古墳(土器群)・土塗: 井戸中塗: 古墳崩壊: 前段: 井戸・古墳(土器群)・土塗: 墓	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1983年』/8/1984	
24 83-2次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『木郷遺跡: 手王山遺跡二ツショット建物に伴う一』柏原市文化財調査報告 1984-IV	
25 94-2次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『木郷遺跡: 手王山遺跡二ツショット建物に伴う一』柏原市文化財調査報告 1984-VI	
26 88-1次	木郷5	柏原教委	古墳崩壊: 井戸群: 千葉屋: 墓	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1988年』/1989	
27 88-1次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1988年』/1989	
28 89-2次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1989年』/1990	
29 91-1次	木郷5	柏原教委	古墳(土器群)	『木郷遺跡 1991-1992年度』柏原市文化財調査報告 1992-II/1993	
30 91-2次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『木郷遺跡 1991-1992年度』柏原市文化財調査報告 1991-II/1992	
31 93-3次	木郷5	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1993年』柏原市文化財調査報告 1993-II/1993	
32 94-1次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1994年』柏原市文化財調査報告 1994-I/1995	
33 94-2次	木郷3	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1994年』柏原市文化財調査報告 1994-II/1995	
34 95-1次	木郷5	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1995年』柏原市文化財調査報告 1995-II/1995	
35 96-1次	木郷5	柏原教委	古墳(土器群)	『柏原市井戸中塗発掘調査報告 1996年』柏原市文化財調査報告 1996-1/1997	
36 96-1次	木郷5	柏原教委	古墳(土器群)	『木郷遺跡: 公共下水溝調査報告書』1996-1/1997	

* 調査名を名付ける者名については以下の通り。大和府教育委員会: 馬場教委、八尾市教育委員会: 八尾教委、柏原市教委員会: 柏原教委、(財)八尾市文化財調査研究会: 当研究会
** 参考は温湯部の調査(開始)日の早い順に付した。

飛鳥時代～中世 この時期の遺物は両遺跡内で出土している。遺構としては、弓削遺跡南部の20で飛鳥時代後期～奈良時代前期の須恵器を主体とする土器群、弓削遺跡北部の1で奈良時代の人面墨書き土器・神功開宝などが出土した井戸、同じく17で奈良時代から鎌倉時代にかけての土坑・溝、弓削遺跡北部の13で平安時代の水田、本郷遺跡北東部の30で古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が出土した溝が検出されている。

近世以降 近世には、本郷村があった本郷遺跡東部以外は概ね耕作地となっており、弓削遺跡の8・19、本郷遺跡北部の24・33などで、断面形が方形の溝状の土坑が検出・確認されている。これらの溝状の土坑は、災害復旧坑と呼ばれるもので、埋土は多くが洪水砂で人為的に埋められ、洪水により埋没した水田を復旧させる目的で掘削されたものである。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地(図2、図版一) 八尾市弓削町南二丁目・志紀町南四丁日の大阪外環状線(国道170号線)の東沿いに位置する。調査区は、下水道の立坑部分の工事により破壊される部分である。規模は、南西-北東方向に長い方形で、長辺7.35m・短辺4.55mである。調査面積は約33.4m²である。

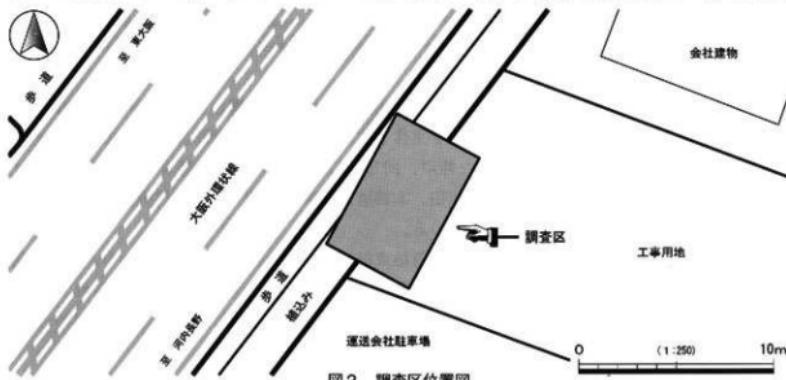
方法 調査とこれに継続して行われる下水道工事により深く掘削されるため、調査区の四方に鋼矢板を打設し掘削する方法が採られた。鋼矢板により囲まれたため、壁面での地層観察は不可能であることから、調査区の南壁沿いに地層観察用のあぜ(幅約50cm)を残し掘削を行った。

掘削 掘削は、当初、市教委の埋蔵文化財調査指示書により、現地表(T.P.+15.0m前後)下2.7m前後までが機械掘削の範囲で、以下0.5m前後までが人力掘削の範囲であった。これにより、現地表下2.7mまで機械掘削を行ったが、遺物を含む層に至らなかった。部分的に人力で掘削し、下位層の遺物・遺構の有無を調べたところ、現地表下3.2m前後までの地層には遺物を含んでいないことを確認したため、現地表下3.2mまでの地層を遺構の有無を確認しながら機械で段階的に除去した。上面で平面精査をしたが遺構が検出されず、現地表下3.4mまでの地層に含まれる遺物も少量であったため、人力・機械を併用し遺物の採取を行った。この時点で、埋蔵文化財調査指示書による掘削範囲に至ったため、市教委に報告し指示を仰いだ。その結果、指示内容が変更され、人力掘削の範囲を1.2m前後とすることになり、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果 古墳時代中期前半の溝1条、古墳時代前期後半の落込み1箇所を検出した。出土遺物は、古墳時代初頭・前期の土師器を主体し、整理用コンテナ(縦60cm×横40cm×高さ20cm)10箱である。

2) 層序(図3、表2、図版一)

調査区南壁沿いの地層観察用のあぜで確認された地層は、遺構埋土を含めて17層である。現地表下2.4~2.7mまでの1層~4層は、中世までには遡らない畑耕作土、以下3.0mまでの5層は洪水堆積層、以下3.5mまでの6層~8層は、古墳時代中期以前には遡らない人為的な攪拌・整地により形成された地層である。これらの地層を除去した面で、古墳時代中期前半の溝と古墳時



代前期後半の落込みが検出された。9層～10-2層は溝の埋土、11-1層～13-2層は落込みの埋土である。14層は古墳時代前期後半までに埋没した河川堆積層と推定される地層である。各層の詳細については表2に示した。

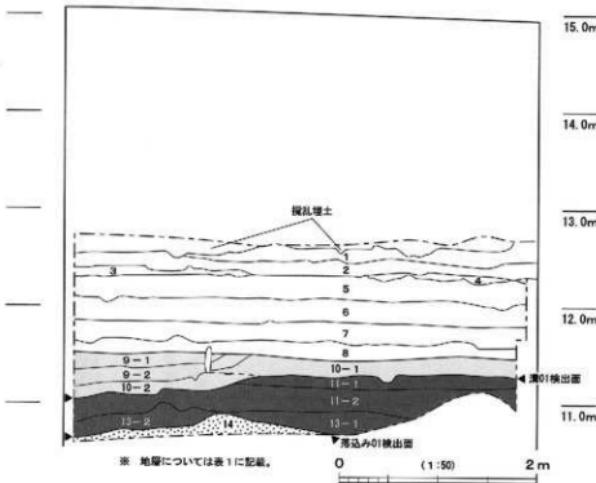
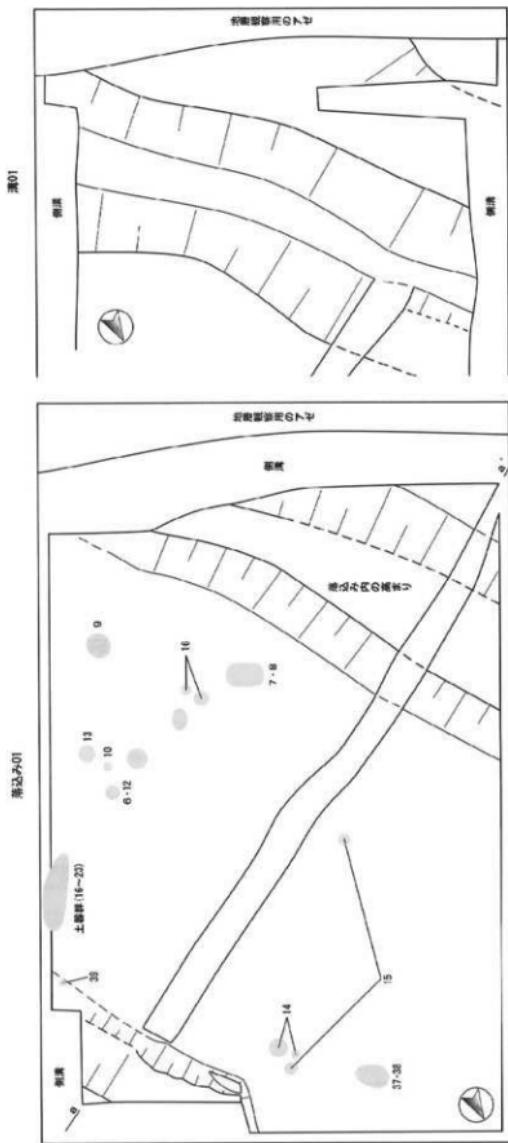


図3 地層断面図

表2 地層一覧表

層序	土色	組成	堆積構造	含有物・変換物	目録
1	10YR4/1に近い黄褐色	成層の砂質～粗粒砂質じる粘質(粗粒～粗細粒)シルト シルト多い。	粗粒砂を疊に含む	炭化物極少&微化マシガン(液点状)	
2	25YR5/3黄褐色	成層の砂質～粗粒砂質じる粘質(粗粒～粗細粒)シルト 粗粒砂の混じり多い。		微化マシガン(液点状)	
3	25YR5/2黄褐色 10YR4/3に近い黄褐色	シルト質粗粒砂 粗粒砂を含むシルト	ブロック状(径1～3cm)	微化マシガン(液点状)岩	
4	10YR5/3に近い黄褐色 10YR4/2に近い黄褐色	粗粒砂～半粒砂 粗粒砂を含むシルト	ブロック状(径1～3cm)	解化灰(落込み灰)	
5	25YR6/1に近い黄褐色 10YR6/5に近い黄褐色	中粒砂～粗粒砂 粗粒の砂～粗粒砂混じる粗粒砂～中粒砂	青苔の互層 上部の礫混じる粗粒砂 下部砂に鉄交換斑、その他の薄層には灰岩塊		
6	25Y4/4に近いリーフ灰褐色	粗粒砂を含む中粒粗粒砂質じる粘土質シルト 粗粒砂を疊に多く含む		上部に微化灰(液状)	
7	10Y4/4灰褐色	小粒の砂～粗粒砂を含む粗粒砂混じる粘土質シルト		上部に微化灰(液状)	
8	25GY4/4に近いリーフ灰褐色 10Y4/4灰褐色	粗粒の砂～粗粒砂多く混じる粘土質(中粒～粗粒砂)シルト 粘土質シルト 形(粗粒～粗粒砂)	所によりブロック状 塊状	粗粒砂の中粒～粗粒の半透水性 炭化物(東塗江北西側では多い)	
9-1	5GY4/4に近いリーフ灰褐色	粗粒砂を含む粘土質シルト 粗粒砂疊～粗粒砂を疊に見せる			
9-2	25GY3/6に近いリーフ灰褐色 5GY5/5に近い灰褐色	シルト質粗粒砂 粗粒砂を含む(老場は主に下部に見られる)		上部に炭化した草本の植物遺体の 土塊の老場を含む	
10-1	7.5GY4/4暗緑褐色 5GY4/5に近いリーフ灰褐色	粗粒の砂～粗粒砂を含む粘土質シルト 粗粒砂を含む粗粒砂混じる砂質(中粒～粗粒砂)シルト 粗粒砂を含む粗粒砂混じる砂質(中粒～粗粒砂)シルト	所によりブロック状(径3～5cm前後) 中粒の土壌を観察		
10-2	10Y4/3に近い黄褐色 5GY5/4に近いリーフ灰褐色	粗粒の砂～粗粒砂を含む粘土質シルト 粗粒の砂～粗粒砂を含む粗粒砂混じる砂質(中粒～粗粒砂)シルト	ブロック状 下部に灰白色に洗じる		
11-1	5GY4/4に近いリーフ灰褐色	粗粒の砂～粗粒砂を含む粘土質(中粒～粗粒砂)シルト		炭化物	
11-2	5GY4/5に近いリーフ灰褐色 7.5GY4/5暗緑褐色	粗粒～粗粒砂を含む砂質(粗粒～粗粒砂)シルト 砂質(粗粒～粗粒砂)シルトを複数段に洗じる	西側では砂層と後者の砂質シルトの境 しじは少ない	炭化物	
13-1	7.5GY4/4暗緑褐色	粗粒～粗粒砂を含むシルト(僅かに土壌)		炭化物	
13-2	2.5GY4/5暗緑褐色 2.5Y3/5暗緑褐色	粗粒砂(中粒～粗粒砂) 無機砂を含む粘土質シルト(下部)	13-1層のブロックを多含む	植物遺体を含む	落込み 01層土
14	2.5GY4/5暗緑褐色 2.5GY5/5暗緑褐色	粗粒砂(中粒～粗粒砂) 無機砂を含む粘土質シルト(下部)	無		河川 層土



上図(図1)遺物出土位(番号は通称番号)

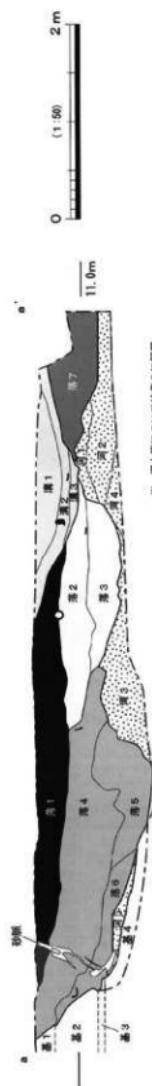


図4 検出遺構平面・断面図

表3 溝01・落ち込み01埋土一覧表

通構	埋土	程度組成	堆積構造	含有物
溝01	溝1 2.5GY4/1層オーリーブ色 5GY5/1層オーリーブ灰色	粘土質泥漬けた粘土質シルト・細粒砂	無層状	腐泥に頗るの半面・鐵器・文化物
	溝2 10Y3/1層オーリーブ灰色	粘土質・粗粒砂混じる粘土質シルト		主に骨部に中層・細粒
	溝3 7GY3/1層オーリーブ灰色	砂質の半面・粗粒砂混じる粘土質シルト・砂質混入		
落ち込み01	落1 2.5GY4/1層オーリーブ灰色	泥炭の半面・粗粒砂混じる粘土質シルト	泥炭では黒の風化少ない	炭化物少
	落2 10Y1/1層	泥炭と砂混じる粘土質シルト	充填を挟む	半分の中層・細粒・文化物
	落3 7GY3/1層オーリーブ灰色	粗粒砂混じる粘土質シルト	既成レンズ状空隙	
	落4 5GY4/1層オーリーブ灰色	半砂質の半面・粗粒砂混じる粘土質シルト・粗粒・粗粒砂・泥炭	既成に砂層を含み、ブロック状	
	落5 10Y4/1層オーリーブ灰色	泥炭層と粗粒砂混じるシルト	ブロック状・空隙状・消滅	
	落6 2.5GY4/1層オーリーブ灰色	シルト・粗粒砂混じる 粗粒の半面・粗粒砂	ブロック状	
	落7 5GY3/1層オーリーブ灰色 5GY5/1層オーリーブ灰色	泥炭の半面・粗粒砂混じる粘土質シルト 粗粒砂	塊状	
河川堆積層	河1 1.7GY4/1層灰黑色 7GY5/1層灰黑色	粗粒砂の混じる粘土質シルト シルト・粗粒砂混入	無層状	
	河2 1.7GY4/1層灰黑色 7GY5/1層灰黑色	粗粒砂混じるシルト シルト・粗粒砂混入	互層(薄層・変遷)	シルトに炭化物
	河3 10Y4/1層 2.5GY4/1層オーリーブ灰色 5GY3/1層オーリーブ灰色	粗粒砂混じるシルト 粗粒砂混じる粗粒砂・粗粒の中層・細粒混じる板状砂層・粗粒砂	互層(薄層・変遷) 互層(シルズ状の薄層)	
	河4 2.5GY3/1層オーリーブ灰色	粗粒砂の半面・粗粒砂混じる粘土質シルト		
鳥居地	河5 7GY3/1層オーリーブ灰色 5GY5/1層オーリーブ灰色	粗粒砂混じるシルト 粗粒砂	非層状・薄層を挟む	主に下部に木本の樹木遺体
	基1 5GY4/1層オーリーブ灰色	泥炭層と砂混じるシルト・黄土		
	基2 2.5GY4/1層オーリーブ灰色	泥炭層と砂混じるシルト・黄土		
	基3 10GY/1層灰黑色	泥炭層と砂混じる粘土質シルト		
地形	基4 10Y5.5/1層・10Y4/1層	粗粒砂・粗粒砂混入	互層(薄層)	炭化物分離む部分では2.5GY4/4層灰黑色
	砂質 砂質	細粒・粗粒砂		

3) 検出構造と出土遺物

・検出構造とその出土遺物

8層までを除去した面(T.P.+11.5m前後)で、古墳時代中期前半の溝1条(溝01)、古墳時代前期後半の溝状の落ち込み1箇所(落ち込み01)が検出された。

溝01(図4・図5、表3・表4、図版二・図版四)

位置・重複関係 調査区南部で検出された。落ち込み01埋土を切る。

規模 北東側の肩を除き調査区外に至るため、全長は不明。幅4.0m以上、検出面からの深さは0.45mである。調査区内では、南東-北西方向に伸びる。南西の肩は緩やかに段をなしている。

埋土 埋土は3層に分けられ、上層(図4-溝1)が粘質土と極細粒砂の互層、中層(同-溝2)が砂礫を含む粘質土、下層(同-溝3)が有機質に富む粘質土に砂礫が混じる層である。堆積状況から、下層は機能的に流水により堆積したもの、中層は人為的に埋められたもの、上層は埋め戻し後の塗みに流水により堆積したものと考えられる。埋土の詳細については、表3に記した。

出土遺物 埋土からの出土遺物は、上層からは須恵器の破片1点が出土したのみで、中層・下層から土師器・須恵器の破片、加工木が多く出土している。この他に中層と下層の境からは、板状の木製品が出土している。中層から出土した土師器の破片の中には、後に記す落ち込み01の埋土から出土した破片と接合するものが数点ある。埋土からの出土遺物のうち、須恵器2点(1・2)、土師器3点(3~5)を図化した。

時期 出土遺物と層位から、古墳時代中期前半に稼動しており、埋め戻されたと推定される。

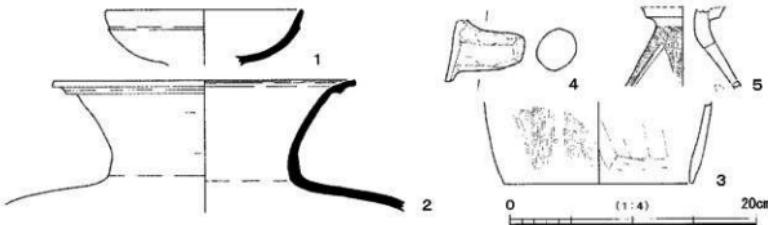


図5 溝01出土遺物実測図

表4 溝01出土遺物

遺物 番号	出土層構 成	種類 種類	残存度 (残存部分)	計測値(cm)	測定・文様等	色調	備考
1	溝01 下層	灰土器 高脚 陶器	底盤・一部器名 残りくび	口径(15.6)	圓軸ナダ	10Y5.5/1灰色	
	溝01 中層	灰土器 高脚 陶器	口縁(1.0)	口径(21.0)	円錐部・底盤: 楔ナダ、身部: ナダ(外側にタキヨロ残る) (表面: 7.5YR 4/4浅黄色)	10Y7/1M白色 (表面: 7.5YR 4/4浅黄色)	
3	溝01 中層	土器部 灰土器	底盤(1.0)	底盤: 腹方のハケ調査、体部内面: ナダ、腹部: ハラケナリ	10YR8/3浅黄色 (身: 10YR7/3浅黄色)		
4	溝01	上部器 灰土器		ナダ	10YR7/3浅黄色、身白色 (身: 10YR7/3浅黄色)		下部は切削(使用時のもの)
5	溝01 下層	土器部 ?	(輪孔跡跡か?)	外底: 瓶方のハツミガタ、内底: ナダ 二角形の三方透孔	25Y7/3浅黄色		

落込み01(図4・図6・図7、表3・表6、図版二~図版八)

位置・重複関係 調査区北東隅を除く調査区全域で検出された。溝01に切られる。基盤層は、調査区北東隅でのみ確認された(図4-基1~基4)。落込み01埋上の下位に、河川堆積物が確認された(同一河1~河4)。落込み01埋土は河川堆積物と基盤層を、河川堆積物は基盤層を切って堆積しており、基盤層の堆積後に河川が形成され、河川の埋没後に落込み01が掘削されたことがわかる。

規模・形状 調査区北東隅を除き調査区外にあるため、全体の規模・形状は不明である。幅8.0 m以上、検出面からの深さ1.2mである。南東~北西方向に伸びる溝状の落込みと推定される。調査区北東隅で検出された落込みの肩は2段になっており、下段部分には農工具(鎌)により掘削されたと見られる痕が残っていた。

埋土 落込み01・溝01に直交する形で設定した埋土観察用の柱部分で確認された埋土は、大きく4層に分けられ、上位から①砂礫が混じる粘質土層(図4-落1)、②有機質に富む粘質土に砂礫を層状に含む層(同-落2・落3)、③砂礫・粘質土のブロックを主体とする層(同-落4~落6)、④砂礫が混じる粘質土層(同-落7)である。調査区北部では①と③の間に炭化物を含む粘質土の堆積が確認された。堆積状況から、①・②は人為的に埋められたもので、②は③の堆積後に形成された溝状の遺構に流水により堆積したものと考えられる。埋土の詳細については、表3に示した。調査区北東部で、河川堆積物と落込み01の埋土を切る砂砾が確認された。

出土遺物 埋土からの出土遺物は、①・②・③、および調査区北西部で①と③の間に堆積する粘質土から、弥生土器・古式土器が出土している。①から出土した古式土器は、完形のものや残存率の高いものが多いが、調査区東部の土器群から出土した土器は、破片を主体とする。土器群の土器は、V様式系・庄内式・布留式が混じっており、二次的な集積であると推測される。出土遺物の中には、埋土の異なる層位から出土した破片で接合関係を持つものが数点含まれ、落込み01が数次に亘る掘削がなされたことが窺える。出土遺物のうち、①(図4-落1)から出土し

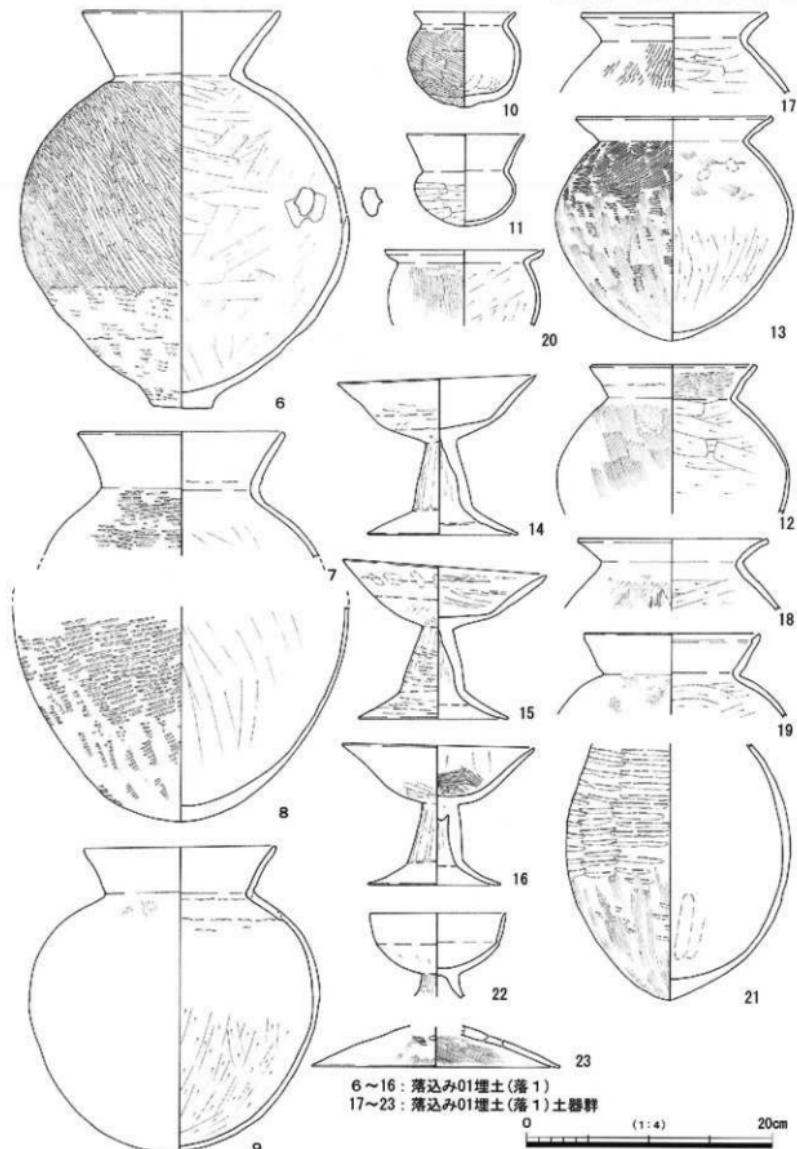


図6 落込み01出土遺物実測図①

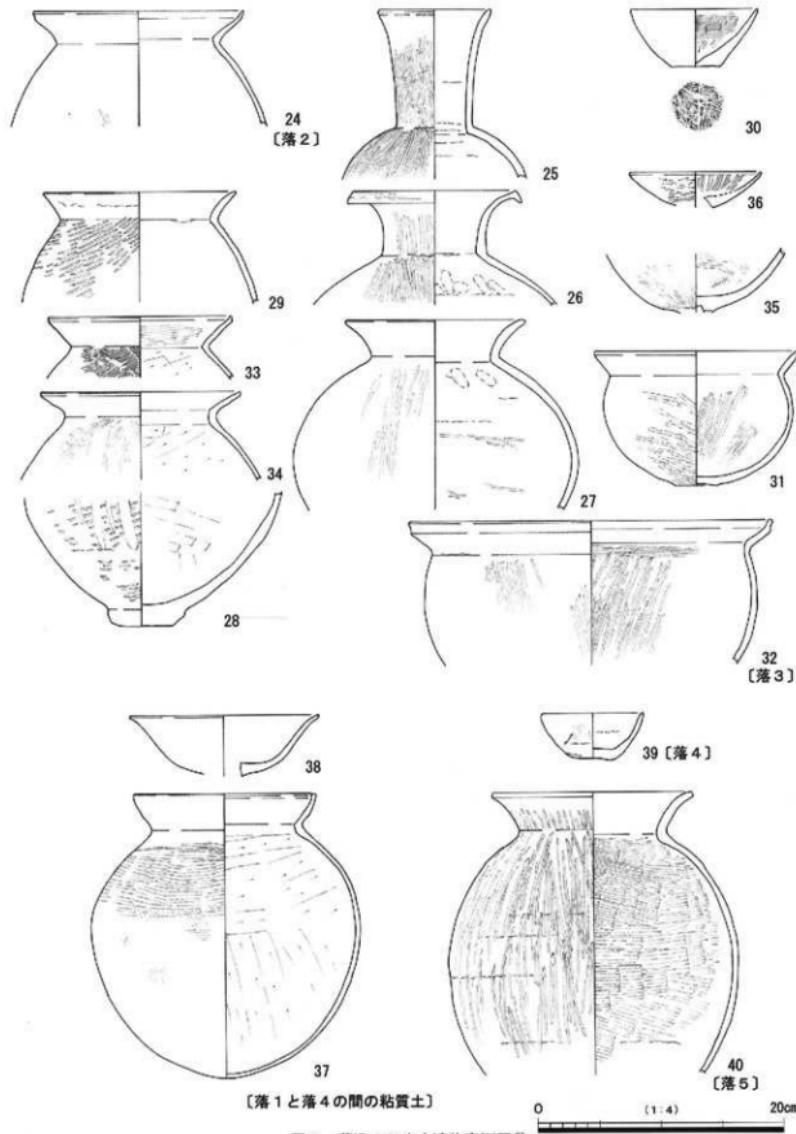


図7 落込み01出土遺物実測図②

表5 落込み01出土遺物

遺物 番号	出土場所 部位	種類 形態	実深度 (発掘部分)	測定値(cm)	既往・文様等	色調	備考
6	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	口径部の3/4 を欠く 底径26 高さ26	口径19.5 底径19.5 高さ26	口縁部：横ナガ、底部外縫上平：舟み方向のヘラミガキ、体 部内縫下平：ナガ(タキ目が切る)、内面：秋ナガ	7.5YR7/3C/AV/褐色	体部外面に黒斑
7	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	山根一品呂 底	口径16.1	口縁部：横ナガ、底部外縫：タタキ、肩部内縫：横ナガ 外：舟上がりのタキ目後ナガ、内面：秋ナガ	外：7.5YR8/3C/AV/褐色 内：10YR8/3C/AV/褐色	
8	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	体部丁字底 底	—	外縫：舟上がりのタキ目後ナガ	10YR6/3C/AV/褐色	7と同一個体
9	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	口縁部の1/2- 底部の1/2を 欠く	口径13.4 底径12.1 高さ23.1	口縁部：横ナガ、底部外縫(ナガ(ハケ目が切る))、体部内縫下平： ハケナガ、他、ナガ	10YR6/3C/AV/褐色	体部外面に黒斑
10	落込み01 頂上部	古式土師器 小甕壺	口縁部の2/3- 体部の1/2を 欠く	口径10.9 底径8.8 高さ19.9	口縁部：横ナガ、体部外縫：舟み方向のヘラミガキ、内面：ナ ガ、崩り出しおよび延縫を作る	2.5YR8/3C/AV/褐色	体部外縫に黒斑
11	落込み01 頂上部	古式土師器 小甕壺底	口縁部の2/3- 底部上半 高さ18.6	口径9.0 底径7.8 高さ18.6	口縁部：ヨコナガ、体部外縫：ハクナジ、体部内縫：ナガ 外：7.5YR5/3C/褐色(外一部 5YR8/3C/褐色)	7.5YR5/3C/褐色	
12	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	舟の1/2	口径13.2	底部外縫：横ナガ、底部内縫：ハケ底、口縫部内縫：ハ ケ底、底部外縫：舟上がりのタキ目後ナガ、舟外縫：ヘリナガ	7.5YR8/3C/褐色	外縫に崩
13	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	口縫部の1/2- 底部1/3	口径15.7 底径13.3 高さ18.3	口縫部：横ナガ、体部外縫：舟上がりのタキ目後ナガ、舟内縫： ハケナガ、舟上半：ハケナガ、舟下半：ハケ脚筋、ナガ	7.5YR5/3C/褐色	体部外縫下平に黒 斑、内縫に崩
14	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	舟部-瓶の 1/3を欠く	口径16.0 底径13.0 高さ12.0	舟部内縫-瓶部外縫：横ナガ、舟部外縫：舟み方向のヘラミガ キ、体部内縫：ハケナガ、他、ナガ	7.5YR7/4C/AV/褐色	
15	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	舟の1/2	口径15.4 底径12.0 高さ12.0	口縫部：横ナガ、舟部内縫：ハケナガ、舟外縫：横ナ ガ、舟部外縫：ヘリナガ、他、ナガ	7.5YR7/4C/AV/褐色	
16	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	舟部-瓶の 1/3	口径15.5 底径13.3 高さ10.5	舟部内縫-瓶部外縫：横ナガ、舟部外縫：ハケ底、瓶部外縫： ハケナガ、舟部内縫：ナガ	7.5YR7/3C/AV/褐色	舟部外縫に黒斑
17	落込み01 頂上部土器群	V字形承 受け	山根部-瓶部 の1/2	口径15.0	山根部：横ナガ、底部外縫：舟上がりのタキ目、瓶部内縫： ナガ	7.5YR7/3C/AV/褐色	
18	落込み01 頂上部土器群	古式土師器 甕	舟部-瓶部-瓶 の1/2	口径15.4	舟部-瓶部上縫：横ナガ、底部外縫：ハケ底、瓶部内縫： ハケナガ	10YR5/3C/AV/褐色	
19	落込み01 頂上部土器群	古式土師器 甕	舟部-瓶部-瓶 の1/2	口径14.2	舟部-瓶部上縫：横ナガ、底部外縫：ハケナガ、体部：ハケ脚筋、体部内縫： ハケナガ	7.5YR7/3C/AV/褐色	舟部外縫に黒
20	落込み01 頂上部土器群	古式土師器 甕	舟部-瓶部-瓶 の1/2	口径12.7	舟部内縫-瓶部外縫：横ナガ、舟部外縫：ハケナ ガ、舟部内縫：ヘリナガ、他、ナガ	7.5YR5/3C/AV/褐色	外縫に黒
21	落込み01 頂上部土器群	古式土師器 甕	舟部上半、体 部1/2-瓶部 の1/2	口径18.1	舟部内縫-瓶部外縫：横ナガ、底部外縫：舟上がりのタキ 目、内縫：ナガ、宋取り	内：SYR6/4C/AV/褐色 外：SYR5/4C/AV/褐色	瓶部上半
22	落込み01 頂上部土器群	古式土師器 甕	舟部を欠く	口径10.8	舟部-瓶部内縫：舟方向のヘリミガキ、瓶部：ナガ、 舟部外縫：ハケ脚筋	7.5YR5/3C/AV/褐色	
23	落込み01 頂上部土器群	古式土師器 甕	舟部の1/4	口径11.0	舟部内縫-瓶部外縫：横ナガ、底部外縫：舟上がりのタ キ目、内縫：ナガ	10YR7/2C/AV/褐色	
24	落込み01 頂上部	古式土師器 甕	舟部-瓶部-瓶 の1/2	口径17.0	舟部内縫-瓶部外縫-舟上半の1/2 舟部内縫-瓶部外縫-舟上半の1/2	外：7.5YR5/3C/AV/褐色 内：10YR4/3C/褐色	
25	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/2- 瓶部1/2	口径9.0	舟部内縫-瓶部外縫-舟上半の1/2 舟部内縫-瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR5/3C/AV/褐色(外 部-7.5YR6/4C/AV/褐色)	体部外縫に黒斑
26	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径13.2	舟部内縫-瓶部外縫-舟上半の1/2 舟部内縫-瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR5/3C/AV/褐色	体部外縫に黒
27	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径14.2	体部内縫：横方向のヘリミガキ、舟部内縫-ナガ(が分岐) 舟部内縫-舟方向のヘリミガキ、他、放送避難のため調査不 明	外：7.5YR7/3C/AV/褐色 内：2.5YR7/3C/褐色	
28	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径10.0	舟部内縫-舟上半の1/2 舟部内縫-舟上半の1/2	外：7.5YR8/3C/AV/褐色 内：10YR5/3C/AV/褐色	底部外縫に黒斑
29	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径15.6	舟部内縫-横ナガ、底部外縫-石上がりのタキ目、瓶部内縫： ナガ	外：10YR2/2C/AV/褐色 内：7.5YR8/3C/AV/褐色	底部外縫に黒
30	落込み01 底3	發生土器 小甕	舟部大の1/2- 瓶部1/2	口径10.2	舟部内縫-舟上半の1/2- 瓶部1/2-舟上半の1/2	10YR7/3C/AV/褐色	
31	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/2- 瓶部1/2	口径14.0	舟部内縫-舟上半の1/2- 瓶部1/2-舟上半の1/2	10YR7/4C/AV/褐色(一部 瓶部外縫-ヘリナガ)	
32	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径12.9	舟部内縫-舟上半の1/2- 瓶部1/2-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR5/2C/AV/褐色	古傳承か
33	落込み01 底3	古式土師器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径14.8	舟部内縫-横ナガ、舟部上半内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR7/2C/AV/褐色	
34	落込み01 底3	古式土師器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径16.2	舟部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR6/3C/AV/褐色	18と同一個体
35	落込み01 底3	古式土師器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径15.8	舟部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR7/3C/AV/褐色	次焼成
36	落込み01 底3	古式土師器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径10.6	舟部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	外：10YR7/2C/AV/褐色 内：10YR7/3C/AV/褐色	
37	落込み01 底1と舟4の間	古式土師器 甕	舟部1/4- 瓶部1/2	口径11.6	舟部内縫-横ナガ、舟部上半内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	10YR7/2C/AV/褐色	外縫に黒斑
38	落込み01 底1と舟4の間	古式土師器 甕	舟部の3/4	口径12.5	舟部内縫-横ナガ、舟部上半内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部内縫-舟上半の1/2- 瓶部外縫-舟上半の1/2	6YR8/4/AV/褐色(外：一部 2.5YR7/3C/褐色)	
39	落込み01 底3	古式土師器 甕	舟部1/2- 瓶部1/2	口径8.0	舟部内縫-横ナガ、舟部外縫-舟み方向のヘラミガキ、 舟部内縫-舟み方向のヘラミガキ、他、ナガ	10YR5/3C/AV/褐色	体部外縫に黒斑
40	落込み01 底3	發生土器 甕	舟部1/2- 瓶部1/2	口径15.0	舟部内縫-横ナガ、舟部外縫-舟み方向のヘラミガキ、 舟部内縫-舟み方向のヘラミガキ、他、ナガ	7.5YR7/3C/AV/褐色	

た古式土師器のうち、①(図4-落1)から出土した古式土師器10点(6~16)、①の下部に帰属する土器群から出土した古式土師器7点(17~23)、②の上部(同-落2)から出土した古式土師器1点(24)、②の下部(同-落3)から出土した弥生土器8点(25~32)・古式土師器4点(33~36)、①と③の間に堆積する粘質土から出土した古式土師器2点(37・38)、③の上部(同-落4)から出土したミニチュア土器1点(39)、③の下部(同-落5)から出土した弥生土器1点(40)を図化した。②の下部(同-落3)から出土した土器は、古墳時代前期後半までのものであるが、大半は弥生土器である。なぜ、古墳時代前期後半までの土器を含みながらも弥生土器が大半を占めるのかは不明であるが、二次的な埋積であることは間違いない。

時期 出土遺物から、古墳時代前期後半に埋没河川を溝状に掘削することにより形成され、古墳時代前期後半の間に数次に亘る掘削、流水・人為による埋没がなされたと考えられる。

・遺構に伴わない出土遺物

遺構に伴わない出土遺物は、主に7層・8層から出土している。落込み01の基盤層(図3-15層、図4-基1~基4)と落込み01埋土の下位層である河川堆積物(図4-河1~河4)からは、人工遺物は出土していない。6層より上位の地層での人工遺物の出土は確認されなかった。以下に、7層・8層の出土遺物について記す。

7層出土遺物(図7、表6、図版八)

7層からは、弥生土器(中期以降)・古式土師器・土師器・須恵器が出土している。このうち古式土師器1点(42)・土師器1点(41)を図化した。41は、ての字口縁を持つ土師器皿で、時期を比

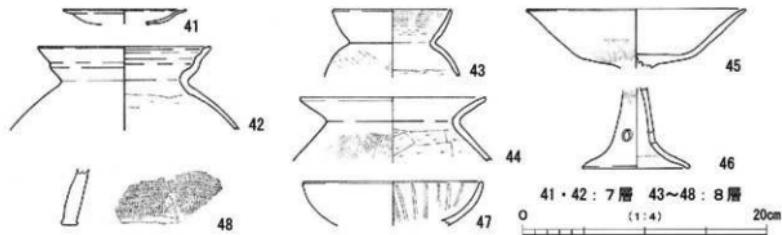


図8 遺構に伴わない出土遺物実測図

表6 遺構に伴わない出土遺物

遺物 番号	出土遺構 層位	種類 名稱	堆積 層位 (焼付剖面)	計測値(cm)	調整・文様等	色調	備考
41	7層	土師器皿	1/5	口径(10.0) 底径(12.0)	口縁部外観：横ナメ、底：表面磨拭のため不明	10YR8/1朱白色	ての字口縁
42	7層	古式土師器 壺	口縁部～体部 底の1/3	口径(14.0)	口縁部：横ナメ、体部外観：ナメ、体部内面：ヘラケズリ	SYR8/3.5朱褐色	
43	8層	古式土師器 小壺	口縁部～肩部 底の1/3	口径(9.0)	口縁部外観：横ナメ、口縁部内面：ハケ調整 底ナメ、底部外観：ハケ調整、底部内面下端：ヘラケズリ	外：5YR8.5/4に近い朱色 内：SYR8.5朱褐色	
44	8層	古式土師器 壺	口縁部～肩部 底の1/5	口径(15.2)	口縁部外観：横ナメ、肩部外観：ハケ調整、肩部内面 ヘラケズリ	10YR8/3に近い朱褐色	
45	8層	古式土師器 壺	口縁部～肩部 底の1/5	口径(17.8)	外裏：埋立方向のハケ調整、底：表面磨拭のため調整不明	外：5YR7/4に近い朱褐色 内：SYR7.5朱褐色	
46	8層	古式土師器 壺	外観	断面(8.6)	外裏：ナメ(柱状底部に円筒形のハケ目残る)、内面：ナメ、柱状底部に円形(径8mm)の三方連丸文	5YR8.5/6朱褐色	
47	8層	土師器 杯	口縁部の1/2, 各部の1/3	口径(14.6)	口縁部：横ナメ、体部外観：ナメ、内面：灰ナメ(洗削跡有)	7.5YR8/4浅朱褐色	内外面に黒
48	8層	馬蹄 内変形	蓋板部の1/9	外裏：底方のハケ調整後方のハケ調査、内面：ナメ	外：SYR6/4に近い朱色 内：7SYR6/1	非燃燒	

定できるものの中では最も新しいものである。7層は、出土遺物から、平安時代中期(10世紀後半)以降の堆積層と考えられる。

8層出土遺物(図7、表6、図版九)

8層からは、弥生土器(後期)・古式土師器・土師器・須恵器・埴輪が出土している。このうち古式土師器4点(43~46)・土師器1点(47)・埴輪1点(48)を図化した。8層出土遺物のうち、最も新しいものは47である。8層は、出土遺物から、飛鳥時代後期(7世紀後半)以降の堆積層と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代前期後半の溝状の落込み1箇所(落込み01)と古墳時代中期前半の溝1条(溝01)を検出した。落込み01は一つの造構として扱ったが、埋土断面の観察から、数次に亘る溝の開削が行われたことがわかる。溝01を含めて、古墳時代前期後半から中期前半にかけて、継続的に南東-北西方向に溝が開削されたことが窺える。

南東約150mの本郷遺跡の調査(図1・表1-29)で、古墳時代前期から中期にかけての大溝が4条検出されている(北野 1993)。これらの大溝のうち、直線的に伸びる2条は南東-北西方向に伸びており、今回の調査で検出された落込み01・溝01の方向と一致する。落込み01・溝01が、本郷遺跡で検出された大溝と同一の溝であるかどうかは断定できないが、関連性があるものと考えられる。本郷遺跡では、大溝の稼動していた時期の竪穴住居が検出されており、「集落を囲む環濠の可能性」が指摘されている(北野 1993)。

今回の調査区では、落込み01・溝01の埋土から、土器を主体とする遺物が多く出土しており、落込み01の埋土上層からは、完形に近いものや残存率の高い土器が出土している。このことから今回の調査区も集落の縁辺に当たると考えられ、落込み01・溝01は集落の縁辺に廻らされた溝であったと推定される。

参考文献

- ・北野 重 「本郷遺跡 1991・1992年度」柏原市文化財概報 1992-Ⅲ



調査地全景(南西から)



南壁沿い地層上部(北から)



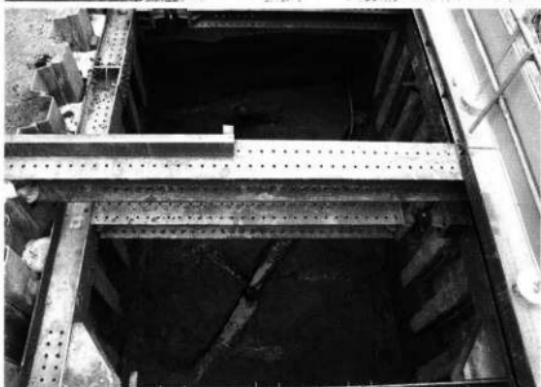
南壁沿い地層下部(北東から)



溝01(北東から)



溝01埋土(北から)



落込み01(北東から)

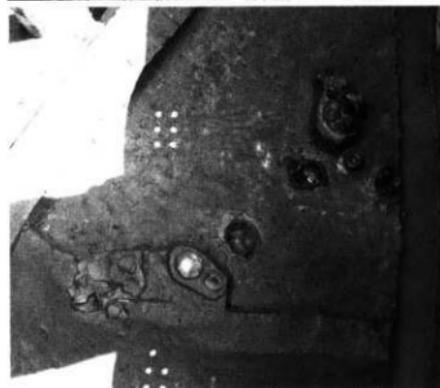


右上：落込み01北部埋土
(南西から)

右中：落込み01南部埋土
(北から)

左下：落込み01[落1]内
遺物出土状況
(調査区中央部、上が北東)

右下：落込み01[落1]内
遺物出土状況
(調査区北部、南東から)





1



2



3



4



5



6



9



7



10



8



11

溝01(1~5)、落込み01(落1:6~11)出土遺物



12



13



14



17



15



18



16



19



20

落込み01(落1:12~16、落1土器群:17~20)出土遺物



21



25



22



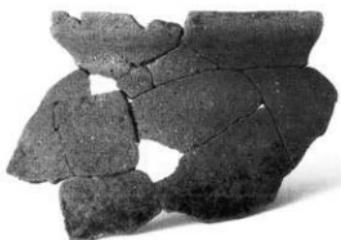
26



23



27

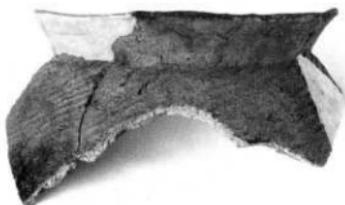


24



28

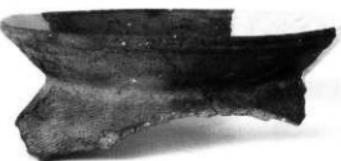
落込み01(落1土器群:21~23、落2:24、落3:25~28)出土遺物



29



32



33



34

30



31



35

落込み01(落3:29~35)出土遺物



39



36



40



37



41



38



42

落込み01(落3・36、落1と落3の間の粘質土:37・38、落5・40)、7層(41・42)出土遺物



43



44



45



47



46



48

8層(43~48)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく112
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告112
副書名	I 大竹西遺跡(第5次調査) II 木の本遺跡(第14次調査) III 木の本遺跡(第15次調査) IV 山賀遺跡(第13次調査) V 弓削遺跡(第7次調査)
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	112
編著者名	I・II成海佳子 III・V 荒川和哉 IV西村公助 荒川
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2008年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大竹西遺跡 (第5次調査)	大阪府八尾市上地町七丁目地内	27212	54	34度38分22秒	135度37分51秒	20070612～0807	約44	公共下水道
木の本遺跡 (第14次調査)	大阪府八尾市木の本一丁目、南木の本七丁目地内	27212	35	34度35分53秒	135度35分21秒	20070125～0131	約23	公共下水道
木の本遺跡 (第15次調査)	大阪府八尾市南木の本九丁目地内	27212	35	34度36分06秒	135度35分35秒	20070219～0221	約49.5	公共下水道
山賀遺跡 (第13次調査)	大阪府八尾市山賀町一・三丁目地内	27212	32	34度38分40秒	135度36分06秒	20070402～0524	約51.52	公共下水道
弓削遺跡 (第7次調査)	大阪府八尾市弓削町二丁目・志紀町南四丁目地内	27212	71	34度35分36秒	135度36分47秒	20070604～0619	約33.4	公共下水道

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大竹西遺跡 (第5次調査)	集落	縄文時代晩期 弥生時代中期～後期 平安～鎌倉時代	地層 河川堆積 耕作土	-	
木の本遺跡 (第14次調査)	集落	平安時代末～中世 近世	河川堆積	-	
木の本遺跡 (第15次調査)	集落	平安時代	耕作土	-	
山賀遺跡 (第13次調査)	集落	弥生時代中期以降 古墳時代後期以降	河川堆積 耕作土	須恵器	
弓削遺跡 (第7次調査)	集落	古墳時代前期後半 古墳時代中期前半	落込み溝	古式土師器 土師器 須恵器	

要約

人竹西遺跡第5次調査では、縄文時代晩期に相当する黒灰色粘土質シルト層を確認した。この層は、周囲の調査でも確認しており、広範囲にわたって堆積している結果を得た。また、弥生時代中期から後期の河川堆積と平安～鎌倉時代の耕作土も確認した。木の本遺跡第14次調査では、平安時代末～中世と近世の河川堆積を確認した。堆積の状況から当調査地は、河川～湿地の状態を繰り返していたことが判明した。木の本遺跡第15次調査では、平安時代の耕作土を確認した。この地層は、周囲の調査でも確認しており、…常に水田あるいは畑に伴う耕作土が広がっていたと推測できる。山賀遺跡第13次調査では弥生時代中期以降の河川堆積と古墳時代後期以降の耕作土を確認した。弓削遺跡第7次では古墳時代前期から中期にかけての落込みと溝を確認した。これらの遺構は周囲の調査結果から、集落の縁辺に埋められた遺構であったと推測される。

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告112

- I 大竹西遺跡（第5次調査）
- II 木の本遺跡（第14次調査）
- III 木の本遺跡（第15次調査）
- IV 山賀遺跡（第13次調査）
- V 弓削遺跡（第7次調査）

発行 平成20年3月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 **佛近畿印刷センター**
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
岡版 ニューエイジ <70Kg>

